
magica=On Line=

Liar-Double

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Magica=On Line

【Nコード】

N4550B

【作者名】

Liar-Double

【あらすじ】

王都ルインに住む普通の少年レイスが、ある日、避難用の地下通路へ足を運ぶと、そこには一軒の古びた店があった。そこで不思議な円を見つけたレイス。そして、レイスの前に一人の魔法使いが時代を超えて現れた。

T h e f i r s t d a y (前 書 き)

* 異世界物語です。 *

The first day

The first day

王都ルイン。ここは最も高レベルの技術を持つ都。

都は第1番区から13番区へ分かれて地域を区別している。

中央区の中央公園ではこの都で有名なアイスクャンディが売られていて、観光客はこの都に着たら、必ず中央区へ行き、アイスクャンディを買って食べるといふ何やらルールのものが観光の内容に定着しているようだ。

中央区に立つ大きなビルは戦争中に爆発に耐えたもので、平和を願う象徴としてこの中央区に立てられたままである。

このルインの中央区に15歳の少年レイスはいた。

レイスはこの区内の郵便配達をしている。もともと、ローラーボードで移動する為、手紙配達と小包配達に回されている。

中央区の大きな坂をレイスはローラーボードで駆け下りる。

「さあて！仕事も終わったし！！街でも回るかな！」

今は夏祭りの真っ最中で中央区の道はどの道にも屋台が出ていてそこに人が集まる。

だが、これが夜になると、サンセット社の作った9000発もの花火を見るため、中央区から人は離れていき、ドーナツ化現象が起こる。

なぜなら、中央区の高い建設物といったら、平和を願うビル以外は住宅なので低すぎるのだ。

だから外から放たれる花火は他の区の建物に姿を隠されて見ることはできない。

さて、そんな楽しみな日。レイスはアップル商店街のゲートをくぐり、商店街の人気のない裏路地へ曲がった。

本来は非常時に使う為に作られた裏通路なのだが、ここは数年前に

ちよつとガラの悪い青年達が酒に酔つて誤つて閉じてあつた入り口を破壊した。それからまだ修理してはいないのでそのままの状態になつていたのであつた。

裏路地をしばらく行くと、地下通路へ繋がるシャッターがあり、レイスはそれをあけて地下通路の中へ入つた。

地下通路には滅多人が来ないため、川の水が流れる音だけが響き渡る。

一体・・・ここに何があるというのか・・・。

レイスはどどん奥へ進む。

すると、奥に一軒の建物が見えてきた。

と、言つても、地下通路で暮らしている者はいない為、その建物に人がいることはないが・・・。

レイスは、その建物のドアを開いた。

入り口には看板が立てかけてあつたが、古い言葉で書いてあるためレイスには読めなかつた。

「うわあ・・・汚い。」

中はおみだらけで蜘蛛達が天井に蜘蛛の巣を張っている。

「さて・・・掃除するか！」

実は、友人の親に頼まれて、レイスはこの建物の中を掃除してほしいといわれていたのだ。

別に使うことはないの、掃除をしたなら勝手に使つてもいいと言われている。

レイスはホウキを持ってはわきだした。

埃が舞うこと・・・蜘蛛は落ちてくること・・・。

本来ここは雑貨屋だつたのだろうか・・・液体の入つていたであろうガラスの瓶やレターの束。小物入れなど、いろいろ四方八方に飛び散らかつていた。

しばらくして、一階の入り口から二階への階段までの面積の半分を片付け終わつたときだつた。

ごみの山の下から、何やら大きな円状のものが現れた。

その姿は半分ほどしか見えていないが、よく見ると円の中に何やら模様が描かれている。

「なんだろう・・・これ。」

レイスは気になりだし・・・いや、興味が出てきて残り半分を急いで片付けた。

しばらくして一階は綺麗に片付いて、人がきちんと住める状態になった。

「さてと・・・なんだろうね。これは」

ホウキを片手にレイスは円を見た。

本当に不思議な模様だ。

一体これは何なのだろうか・・・。

「・・・あ・・・」

しばらく眺めていると、その円は薄いパープル色の光を放ち出し、模様が光に包まれて見えなくなった。

この時が彼ととの初めての出会いだった

「・・・あ・・・あんた・・・」

目の前の光景にレイスは目を疑った

なぜならば・・・

「あんた・・・誰？」

円からあふれ出た光の中から人が現れたのだから・・・。

やがて光はゆつくりと収まり、少し宙に浮いていた謎の人物は床に足を下ろした。

その者の身にまとう異国の服は、円から吹いてくる風になびいてその者の顔を隠したままだ。

そしてしばらくして風がやむと・・・異国の服の後ろから、奇妙なペイントを描き半分に割れた仮面の顔が現れた。

「う・・・うわあああああッ?!」

その仮面の奇妙なペイントが気味が悪くてレイスは後ずさった。

「うわっ?!」

その声に驚いて相手も驚きの声を上げた。

レイスは、ホウキを構えて

「お前！一体何者だッ!!」

と、一声。

すると、謎の人物は不思議そうに首をかしげながらレイスに近づいてきた。

足音を立てずに、静かに、そしてゆっくりと。

近づいてくる分、レイスも後ろへ下がる。

一歩近づくと一歩下がる。また一歩近づくとまた一歩下がる・・・。

その繰り返しに謎の人物は耐え切れなくて、謎の人物は3m程離れた距離からレイスの元へ飛んできた。

「うわあっ?!やだやだやだ!!!」

「・・・そんなに拒否しないでください・・・別に怪しい者ではありませんし」

「十分怪しいぞッ!!!なんだその奇妙な仮面!!変な服!!変な色の髪!!」

「酷ッ」

一歩引いた謎の人物は怒ったのか、急に少し大きな声も出してきた。

「言っておきますけど!!この髪の毛は普通です!!地毛です!!」

仮面は確かに変かも知れませんが、服は私の時代では普通なんです!!分かりましたか!?!」

その言葉を聞いた瞬間レイスは疑問点が浮かんだ。

「・・・自分の時代・・・?」

「ああ、そうでした、言い忘れていましたね。私過去の世界から着ました。名前は忘れましたが魔法導芸師です。よろしくお願ひします。」

「忘れたって・・・;」

「貴方からの質問に答えられませんでしたが、今度は私からの質問

です。貴方は私のお店で何をしているのですか？」

「・・・店？ここ・・・店だったの？汚すぎて分からなかった・・・」

「そりゃあ、私の時代から1000年も経過しているんです。汚れていて当たり前です。だって私はこの時代では死んでいるんですから!!!」

「1000年ツ？！うわっ！！もうあんた老いぼれじゃんかッ！！」

「・・・まだ27です・・・で、何してたんですか。」

1トーン低めの声で魔法導芸師は聞いてきた。

「あ、そうだった。俺はここを掃除するように友人の親に頼まれたんだ。でも不思議だ、なんであんたはこんな地下通路に店立ててるんだ？誰も来ない場所なのに」

「私は光の下は出歩けないんですよ、光が差すと、右目が見えなくなるんです。だから当時はここに住んでました。ここなら右目を隠さずとも薄い光だけで生活できますし。」

「ふーん・・・大変なんだなあんだ」

「それにしても貴方よく綺麗にしましたね。1000年分の汚れを、関心します。・・・そうだ、貴方の名前は？」

魔法導芸師は持っていた杖を振ってレイスに聞いてきた。

「俺はレイス」

「レイス・・・そうですか。」

魔法導芸師は円の上に立ち、杖を構えた。

帰るのかとレイスは思ったが、何やら違うようだ。

「何するの？」

「店を綺麗にして新しくします。・・・星よ、我に星の力の力を貸したまえ。」

魔法導芸師が杖を振ると、一階は先ほどより綺麗になり、面積が増えた。

そして、壁の色を塗り替えられて家具が幾つか増えた。

二階でも同じことが起こっているのだろう、物音がする。

「・・・はいおわり。で、レイスさん」

「レイスでいいよ。」

「分かりました。レイス、貴方は私とこの店をやってみませんか？」

「・・・え・・・？」

「ちょっと待って待って。いかにも怪しいこんな奴と俺が店を運営？

！恐ろしくてできないよ！！

だってこいつ素顔すら見せないじゃんかよ！！

「・・・救急箱どこありますっけ・・・」

魔法導芸師は救急箱を見つげるため部屋をうろろしている。

「・・・その変な技で出せば・・・？」

「失礼ですね、変な技とはなんですか。れっきとした【魔法】です。」

「ああ・・・じゃあその、まほうとやらで出せば？」

「嫌ですよ、そんなんじやグータラ者になっちゃうじゃないですか。

それに魔法使う分体力と精神力減るんですもん。誤って使いすぎた

ら1日中寝ちゃうことになりますし。」

「へー・・・（よくわかんないや・・・）」

「あ、ありましたありました！眼帯どこかな・・・」

「何に使うんだ・・・？」

距離を置いて聞いてみた。

「この時代じゃあ・・・仮面だと冷やかされますしね。眼帯に替え

ようかと・・・あ、見ないでくださいね」

レイスに背を向けて仮面を床に落とすと、すばやく眼帯をつけた。

そして、レイスの方へ振り返った。

すると初めて顔の大体の姿が分かった。

白い肌に蒼い左の瞳。黄緑色の髪の毛のした見えるエメラルドグリ

ーンのピアス。

「ねえ、レイス。私に名前をください！」

初めて見た3/2くらいの素顔にレイスは何かを覚えた。

「・・・セシル。」

「セシル……ですか。……いい名前。勿体無いくらい。ありがとう。」

近づいてくるセシルからレイスは後ずさる。

「……まだ……私が怖い……ですか？」

「セシルは嫌いだよ。気味が悪いもの。大体何さ、まほうって。どうせ呪いの呪文なんかの一種だろ？それで俺を殺そうとおもってるんだろ？てか、自分の時代に戻れよ、何しに来たのかしらないけどさ、ここは俺達の時代だ。」

「……それは……」

「！」

レイスはセシルの手の変化に気がついた。

手は、水のように一部、透けていたのだ。

「……私は……探し物があるんです……この時代に……」

「なあ……アンタ……本当のことを言ってくれ、アンタ本当は何者なんだ？なんで手……透けてるんだ？」

「……それは……」

次の言葉を出す前にセシルは後ろに倒れた。

「え?! ちよ……セシル?! おいッ!!」

揺さぶつても、頬を叩いても、呼びかけても返事は返ってこない。

「おいおいヤベーな……」

このまま放っておいたらまずいだろう……あまり好きではないが、それでも人一人の命は大切な尊い命だ。レイスはセシルを抱えて、二階にベットのがある部屋を探した。

先ほどの改築魔法できちんと寝室は作られていた。

とりあえずレイスはその中に入って、セシルを横にしておいた。

「……まほう……の使いすぎなのかな？」

横目でセシルを一度見てから、レイスは一旦一階に下りて、冷えた水とタオルを用意してまた戻ってきた。

ぬらしたタオルを額におく、と、普通ならここで目覚めるのが話しの展開では当たり前前だろうが、セシルは一向に目を覚まさない。

「・・・これ・・・放っておいたらまずいよな・・・」

過去の世界から来たのなら、身寄りの一人もいないはず。

「仕方ねえ・・・仕事ないとき以外は見に来てやるか・・・」

ちよつと行き先不安になり始めたレイスだった。

The first day (後書き)

2006年から書いていたmagicaを書いてみました。

ブログで連載しているのですが、ブログではタイトルが【magica】なんです。何故Onlineと付け足したのかと言うと、本化しようと思い、友達に相談で言ってみたときに【友達の輪】と言う意味を付け足したい。

と提案してみたら「いいんじゃないね？」みたいな変事がかえって来ましたので思い切って付け足してみました。

かなり出来の悪い子ですが、見てあげてください！

The second day

レイスは今日も朝からものすごい速さでボードに乗って坂を下りて手紙を配達する。一体どうすれば1番区から13番区までたった一時間半で回りきり、手紙を配達し終わるのだろうか。

正直その点は誰にも解けない謎である。

配達を終えて、13番区の教会の近くの橋の下に丁度来た列車に飛び乗る。

一息ついて、列車の上に横になり、後は中央区へ戻るのをしばらく待つだけだ。

「ふー・・・早く終わったし。朝飯食わないとな。あーそういえば冷蔵庫何にもないんだっけ。あーそういえば、と」

新聞に挟まれていたチラシをバツクからだして見る。

今日はここで野菜が安い。あの店では洗剤がお一人様2箱。

次々すばやくチラシに目を通す。

「あ、セシル倒れてたんだっけ。流石に食材とかまだおいてないだろうし。立てるのかな・・・」

風に揺られて小一時間。中央区の店で食材や必要な生活用品を買い、セシルの店へ向かった。

「おっはよーさん」

勢いよくドアを開けて中に入る。と、そこにはセシルが立っていた。とても驚いた表情で。

「びっくりしたあ；ドアはゆっくり開けてください！！心臓に悪いです；；」

「あ、悪い。つか、もう大丈夫なん？」

「何がですか？」

「何がって、昨日倒れたじゃんか」

「ああ、昨日の。」

「そう、昨日の。」

「大丈夫です。貴方が運んでくれたんですか？ありがとうございます。」

「いや・・・別に。」

「こんなに会話をしているがやはりまだ距離感がある。」

「あの、ところで何をしに？」

「え？あ、ああ、アンタ何も食材ないだろうなって思って買ってきたんだよ。」

「わあ。助かります。ありがとうございます。」

レイスのほうへセシルが近づこうとしたのをレイスは待ったをかけて、食材の入った袋をテーブルの上に置いた。

「・・・まだ信じてないぞ俺は。」

「私が貴方を食べるとでも？」

「ああ」

セシルはため息をついてお茶を入れ始める。レイスの分も入れているようだ。

それからお茶を入れ終わるまで何の言葉も発さない二人・・・。

セシルはお茶を入れるとテーブルの中心にカップを置いて「どうぞ」と、言つと、

部屋の隅にある本棚の前へ移動した。

そしてそこへ座り込み分厚い本を読み始める。

しばらく、何の会話もないまま時は過ぎた。

重苦しい空気がその場にあふれてきているのがよく分かる。レイスはその中口を開いた。

「あのさ・・・アンタ腹減ってない？」

「お腹が空いているのであれば奥の台所使ってくれてかまいませんよ。」

「俺はアンタに聞いてるんだ」

しかし、セシルは返事をせず、本に集中する。

その態度に腹を立てたのか怒鳴った。

「聞けよッ！」

「・・・はぁ・・・」

パタンつと、本を閉じると、レイスの方へ向き直った。

「貴方が私を警戒するから、私も貴方を警戒しているんですが、どれほど嫌か分かりますか？」

「・・・え」

「私は確かに今の時代の貴方達から見たら変な人かもしれませんが、ですが、私も人間です。」

同じ人間としてみて欲しいのです。」

その言葉を聞いてレイスは、はっとした。

（そっか・・・そうだよな。俺は馬鹿だったよ。）

同じ人間なのに、セシルがまほうとか言うの使うから同じ人間と見ていなかったんだ。

そりゃあセシルだって怒るよな。（

「セシル、ごめんな。俺、お前のこと同じ人間として見ていなかった。」

「もういいですよ。分かってくれたなら。」

セシルは食材の入った袋からトマトやきゅうりを出すと笑顔で振り向いた。

「さ、レイスが私のために持って来てくれた野菜さん達の鮮度が高いうちに朝食を作りましょう！私、お腹が空いてしまいました。」

「ああ」

レイスは初めてセシルの横に立って笑った。

「初めて笑ってくれましたね。」

「そりゃあ、お前、だってさあ」

セシルと食材の袋を台所まで運ぶとフライパンに火をつけて

「友達だもん」

と言い切り、野菜を切っていく。

セシルは何も言わず、ただ呆然としてレイスを見ていた。

手にしていたトマトは握りつぶしちゃっていたりするけど。

「うわッ?! セシル何してんのおおおお?!?! トマトがーッ
!!!!

うわぁブラットレイみたいじゃんかよーッ!!」

ぐちゃっ、と言う背後の効果音に気がついたのか振り向いてその状況を見てレイスは焦る。

「へ? あ。」

「『あ。』じゃ又エエエエエエッ!!! 一刻も早くトマトさんを
離せ!!! 開放して!!!」

トマトさんがお一人、いや、一個無残な姿になったので朝からはちよつとキツイが、

他に思いつかなかったのでトマトカレーになってしまった。

「レイス。朝からカレーが食べられるとは思いませんでしたよ。」

につこり笑って手を動かして口に運んでいるがセシルの顔色はよいとは言えたものではなかった。

「やっぱり朝はさっぱり系だよな。朝からのカレーがこんなにきついとは思わなかった。」

「同意です。でも」

セシルは一口、口に運んで

「おいしいです」

と笑って答えた。

「ぶっ。」

「何ですか。」

「セシルッ。か、顔。あははッ。」

「何ですか、もー。」

「口周りついてる。」

「えっ。」

「お前子供みたいだな。」

二日目の朝の食卓の風景。

T h e s e c o n d d a y (後 書 き)

セシルとレイスが出会って二日目の話。

これからどうなるのか、自分で先が分かっているのに気になる自分が時々います(笑)

The second day【B】

「ところでさ、セシル。聞きたいことがあるんだけど」

朝食を済ませ、食器を片付け終わり二人は座ってお茶を飲んでいた。

「はい、なんででしょう。」

セシルは分厚い本を閉じ、レイスの方へ目を向けた。

「この床にある円って何なの。スッゲー気になるんだけど。」

「ああ、これですか。これは【魔法回路】に通じる魔法陣です。」

「まほーかいろ?」

「はい。魔法回路です。そうですねー。簡単に言えば私の中に蓄積している魔力を使って扉を開いて好きな場所に行けるド扉みたいなものですね。」

「えっと…ちくせき、とか、まりよくって何?」

「そこから質問しますか。そうですね。あ、いつそレイスも魔法を覚えませんか。そしたらよく分かりますよ。」

「俺に出来る訳ないよ。だってそれ呪術師みたいに生まれたときから呪術の力を持つてるように、セシルも生まれたときからその、まほーとかいう力を持って使えるんだろ。」

「まあ、確かに呪術師も魔法使いも生まれた時から持ち合わせている力から呪術や魔法を煉るわけですが、人は誰でも小さい魔力と呪力を持つております、ですからそれをちゃんとした者がその力を目覚めさせれば、誰でも魔法、呪術、どちらも使うことが出来ます。」

「なんかあつさり言い切ったな…。すると、俺の中に魔力、呪力があるんだよな。でも、誰がその力を目覚めさせるんだ?」

「私が目覚めさせます。」

「出来るの?」

「出来ますよ。その魔法陣の上に立つてください。早速始めますよ」セシルは立ち上がって階段に立てかけていた杖をとりに行った。

「でもこれ魔法回路だよな。俺他の場所に飛んだりしない?」

「大丈夫です。魔法陣の中の文字を書き換えるだけでいいんですし」
「え…これ文字だったの？」

「魔法使い用の1000年前の文字ですよ。現代の文字に書き換えても効果はそのままなんで魔法陣扱えるようになったら使っていていいですよ。それじゃあ始めます。動かないでくださいね？」

セシルは杖と同じ長さの燭台を魔法陣の四隅に立てて、蒼い炎を灯した。

すると部屋の中は一気に薄暗くなった。

そして杖の先についている蒼い石が紫から赤色へ変わると、バトンのように回して魔法陣の上へつ突きおろした。

「眠りし種子よ、今深い眠りから覚め、主、レイスに真の力を目覚めさせよ」

何やらその後も唱え続けているが、よく聞こえない。

レイスはじつと立っついていて変化に気がついた。

足元の魔法陣の文字が変化している。

うつすら魔法陣が光りだすと、体に何か熱いものが走る。

これは一体…

そのとき、魔法陣が一気にカツと光った。かと思うと、すぐに収まっってしまった。

「セシル？」

「終わりましたよー。」

「何？今ので俺の中の魔力が目覚めたの？」

「ええ。ただ…魔法使い（まだ見習いですが）になると変化があるんですよ…」

「何？」

セシルは手鏡を取り出してレイスに向けた。

レイスは手鏡に映った自分の顔を見て驚いた。

「なっ…髪の毛が茶髪に?!目の色も青が赤に?!」

「あははー。綺麗ですよ、その色」

「これ、親がいたら完璧怒られたらどうな…でも明日からどうやっ

て仕事場に行けば……」

「簡単なことじゃないですか。ここで働けばいいんです。」

あっさりとセシルは言い切った

ここで仕事を？ いやいやいや、いくらなんでも地下通路にある店に誰が好き好んで来るんだ？

てか誰も来ないよ。断言するね。こんな薄暗いばしょ誰も来ないよ。

「無理だろ。誰がこんな地下通路にくるんだ？」

「来ますよー。明日あたりビラ配って様子みましようよ。」

「……なんか騙されてしまった気がしてきた……」

こうしてこの日、レイスは郵便配達屋から魔法使いへ転職し、魔法を勉強することになった。

この日は、昼から夜にかけてセシルがつきつきりで初期魔法を覚えさせたとか。

T h e s e c o n d a d a y 【B】(後書き)

二回目の話のおまけ▽

The third day

レイスは結局そのままの姿で郵便配達の本社へ通勤したのだが、本社の社長さんと社員がドアを開けて入ってきたレイスを見て固まるのに時間は要らなかった。

仕事が出来るか社長に聞いてみたら、社長は「大丈夫だ」といって、今日も手紙の入ったクリアケースを手渡してきてくれた。

ああ…なんて優しい社長なんだ。俺ここにバイトに来てよかったよ…でも、レイスはこの髪の毛は普通で構わないのだがこの瞳の色が気に入らない。

レイスは手紙を配り終わると、セシルの元へ行った。

「おはようございます」

薄暗い地下通路の中に立てられた店の前に植木鉢を幾つか置いて、花を植え、水を与えているところに丁度レイスは来た。

「花？こんなところで育つのか？日の光浴びないと背え高くならねえぞ？」

「大丈夫ですよ。この花は暗い場所でも育つように改良した花なんです。綺麗に咲きますよ。」

「魔法で？」

「いえ、遺伝子改造で。」

「お前何気にすげえな。」

レイスは感心するしかなかった。

「ところでセシル、この店何の店にするの？」

店の中に入って冷蔵庫に食材を詰め込みながらレイスは聞いてみた。しかし、返事は返ってこない。

なぜ言葉を返してこないんだろうか…不思議に思い、店の外を覗いてみた。

「…え…」

先ほどセシルのいた場所には如雨露がさびしく一人、座り込んでい

た。

薄暗い地下通路には明かりが灯してないため、辺りにセシルがいるか確認できず、ただ、水道管から流れ行く水の音がするだけだった。

「セシルー？」

「はい？何ですか？」

「うおッ?!」

呼びかけると、セシルは屋根の上から逆さになって顔を出してきた。「何してるのさ。びっくりした…。」

「キノコの育成してるんです。出来ましたよ、食用。」

「食用って…何？まだ他にあるの？」

「ええ。薬用、実験用、遺伝子組み換えキノコ…あ、危険な毒のあるキノコもありますねー。」

「ああ。とりあえず毒キノコは捨てる。一刻も早く。」

セシルはしぶしぶ毒キノコを抜いてゴミ箱に捨てた。

後からレイスはゴミ箱の中を覗いたのだが、キノコは紫の体に赤と緑の斑点の化粧をして、キノコのチャームポイントでもある傘を5cmくらいに大きくし、ふやけたような姿をしていた。

うわぁ…気持ち悪ッ。

それがレイスの率直な感想。

一刻も早くこのキノコはごみ出しに出したほうがよさそうだ。

そしてレイスはゴミ箱から離れてお茶を入れているセシルを見て驚いた。

「せ…セシル」

「何ですか？」

「あ…頭の上に…き…キノコが…」

先ほどはセシルがフードを被っていたため、気がつかなかったが、フードを被っていない今、やっと気がついた。

レイスの指差すセシルの頭の上にはなんと…橙色の衣に黄色い斑点の化粧をしたなんとも可愛らしい丸型キノコがちょこんと、セシルの頭の上に座っていた。

「…なんで？」

「…さあ…？」

なぜ人間の頭の上で育っているのか…謎だ。とりあえずどうすればいいのかわからない。もし分かったとしてもどうすればいいのだろう。

病院に行くべきなのだろうか。それとも記念写真を撮るべきなのだろうか。引っこ抜いてみるべきなのだろうか。そのまま育ててみるべきなのだろうか。

「…と…とりあえず抜いてみる？」

レイスはそつとセシルのキノコに触れてみた。

「うわッ。ちょ…やばいつて！今感覚的なものが走ったって…！」
驚きすぎて、セシルの綺麗な言葉が一気に汚くなった。

レイスもセシルの驚きようにびっくりする。

どうやらこのキノコにはセシルの感覚器官が通っているらしい。つまりこのキノコはセシルの体の一部になるというわけ…。

結論…抜いたら危険なのではないのか？

やばい…どうしようもない…！！

二人の頭はもうパニック状態である。

とりあえず落ち着け俺。まず冷静になれ。

とにかく、セシルを医者に見せよう。

「セシル、街にでるよ。医者に行こう。」

「街にですか？」

「そう。眼帯してるから大丈夫だろ？それにお前の服フードついてるから深く被れば日の光防げるだろ？」

「わかりました。」

さあ、不思議なことにセシルの頭にキノコが生えました。
一体このキノコの正体は？

T h e t h i r d d a y (後 書 き)

3 日 目 の お 話 。

長 い で す 。

The third day【B】

セシルの頭に生えたキノコ（面倒だから略してセシルキノコ）を頭の上から撤去したいのは山々なのだが、引っこ抜いていいのやいけないのやら…。

とにかく二人は病院へ向かった…のだが…。

「人がいっぱいですね。彼らはこれから何処へ向かうのでしょうか？」
朝の通勤ラッシュに巻き込まれていた。

レイスは郵便配達屋の為人より早く活動し始めるため、ラッシュに巻き込まれないのだが、すっかり忘れていて、中央区の駅でラッシュに飲み込まれていた。

「朝の通勤・通学ラッシュだよ。嫌になるなあ…もう。」
不機嫌そうにホームを見渡す。

見ただけでもうんざりする。おそらく、始発は満員だろう。
何か他に早く行ける術はないのかをレイスは考えてみた。

その間、セシルはずっと隣で「つうきん？つうがく？ラッシュ？」と、呪文を唱え続けていた。

間違っても魔法は出さないで欲しいが。

「仕方ねえな…リアルポート使うか。」
「？」

レイスはセシルを引っ張りながら駅員のところへ行く。

「すみません、リアルポート残ってますか？」

「はい。まだ残っております。」
「じゃあ、一台貸して。」

「かしこまりました。ではこれを。」

レイスは駅員からカードキーを受け取ると、ホームの西側にある階段を上って反対側のホームへ降りると、『仮乗車』と書かれたゲートを開いて中へ入った。

中は真っ白な床と壁。天井は抜けていて青空が広がっていた。

「レイス…ここは何もありませんよ？」

「あるよ。こっち。」

レイスはセシルをぐいぐい引つ張って中央まで行く。すると中央にカードキーを入れる台が自動的に床から出てきた。台には2mくらいの高さのある細長いへこみがある。

そこへレイスはカードキーを差し込んだ。

『右側のA 20ゲートへどうぞ。』

アナウンスが鳴り右側の白い壁に扉が浮き出てきた。

それをレイスは開いて、さらに奥にある扉でA 20の扉をあける。するとそこには鉄の鳥が一羽静かに待っていた。

「ほら、乗って。操縦は俺がするから」

「乗る？これは乗り物なんですか？」

「そう。ほら早く。後ろ乗れよ」

「えっと…うわっ?!」

レイスは何処から乗るのか分からずにエリアルボートの周りをうろろしているセシルを捕まえて、後部座席に無理矢理乗せると、操縦桿を握ってエリアルボートを浮上させ、抜けている天井から都の空へ飛び出した。

「しっかり、つかまってるよ！」

レイスがそう言うと、エリアルボードは回転しながら中央区の空を翔けて行った。

「うわああああああ嫌ーーーーーッ！ーーーーッ！ーーーーッ！やめ…！恐怖エーーーーーッ！」

…セシルは正気を保っていないようだが、そのまま8番区の有名医師のいる病院へ向かった。

「こんにちわー！ヴァルツク先生ーッ！」

陽気な声でセシルを引きずりながら裏口から入ってきた。

「ここは病院ですよ、と。もうちょっと静かにしやがれ。でねえと殴るぞ、と。」

タバコをふかしながら白い白衣にぼろぼろのサンダルを履いてだるそうにヴァルック医師は歩いてきた。

「どうした、今日は。腹筋にコーカサスオオカブトでも刺さったか？」

「んなもん刺さったらスゲエわ。てか叫びながら走ってくるよ。今日はこいつだ」

そういつて気絶しているセシルをヴァルックに投げつけた。

「グハアツ?!」

ヴァルックに500のダメージ。セシル、戦闘不能。

「…くツ…で?こいつは何?何の病気?怪我?精神障害者?」

「精神障害者じゃねぞゴルア。」

いきなり起き上がってセシルはヴァルックの胸倉を掴みかかってきた。

ああ…だんだんセシルの言葉が汚れていく。

もうセシルはキノコが問題じゃなくて言葉が問題だ(あと行動)とりあえず、ヴァルックはセシルのみぞおちに拳をクリティカルヒットさせて気絶させると診察室へ運んでいった。

「なんだあ?このキノコは。あれか?コスプレとかでつけてたやつ
のあれか?」

「違いますよ、勝手に育ってるんですよ」

「ふーん…まあどうでっちゃんいいんだけど、これ3日もすればとれるぞ、と」

「3日?!」

「ああ、3日も我慢すれば、ポロツだ。」

なんて簡単な撤去方法なんだ!!

「まあ…結局これって何なんですか?」

セシルはヴァルックに聞いてみた。

すると、ヴァルックは分厚い植物図鑑を取り出して真ん中辺りのページを開くとセシルに見せた。

「最初はただのウイルス菌なんだ。風邪とかの。でも何かの菌と合体してどこかに根を下ろすと、一日で生えてくる謎のキノコ。まあ、たまたまそこに根をおろしたただけだよ。」

「な…なんだ。セシルがキノコになっちゃうのかと思っちゃったじやんか」

「ならない。絶対。」

「まあとにかく、お前ら帰れ。もう用はねえんだろ、と。今忙しいんだぞ、と。」

ヴァルツクはさっさと診察室から出て行った。

「…忙しい？」

「…あ…」

何かに気がついたのか、セシルはヴァルツクの後を追うように診察室から出て行ってしまった。

レイスも急いで追いかけた。

The third day【C】

薬品のおいと、看護師達の歩く足音。

治療器具のぶつかり合い奏でる奇妙なメロデー。

行きかう患者達はあまりよい表情はしてはいない。

白く長い廊下を足音も立てずにセシルはヴァルツクの後を追うように駆けていく。

レイスも患者と看護師達を掻き分けながらセシルの後を追う。

そして広い場所に出ると、見知らぬ男性とセシルが向き合っていた。

「…アンタ…誰？」

男性は気だるそうに長い前髪をしたからセシルを見る。

身長はセシルより高く、見下ろしている状態である。

セシルの左目はずっと男性を凝視し、にらみつけている。

「貴方こそ…誰？」

「強い魔力を感じる…アンタ…魔法使いだね？」

「貴方もね…目的はなんだ？魔法使い。」

「僕は…世界一強い魔法使いになりたいんだ。だから、アンタを倒したい。いや、倒すんだ。さあ、戦おうじゃないか。」

「ここには大勢の患者がいます。よろしければ外で戦いたいものですが。」

「いいよー。ただし、条件がある。」

「？」

見知らぬ魔法使いは不敵な笑みを浮かべて、こう言った。

「この病院に爆弾を仕掛けた。それを、解除できたらいいよ。もちろん魔法使うのはなし。ちなみに、制限時間は30分」

「爆弾？！貴方…人の命をなんだと！！！」

「ヒントは『聖域』だ。じゃあな、お前の勇気がどれほどのものか、見といてやるぜ」

そういつて、見知らぬ魔法使いは笑いながら外へ出て行った。

「…汚い…レイス、早く探すよ。大勢の患者と周辺の住人に被害が
です。」

「あ、おう。」

制限時間は30分。そんなに時間がない。

とにかく二人は必死になって探した。

病室からナースステーション。売店から集いの場、エレベーターに
廊下の隅々まで。

屋上行ったり…しかし、爆弾なんてものは見つからない。

「なあ、もしかして、ないんじゃないのか？」

「いえ、あるはずですよ…そう、ヒントですよ！！確か…聖域って
言っていましたね。」

「聖域…？なんだよー神々の領域なんかねえぞおー…」

「神々の領域…あ！あります！一部屋だけ！！」

「え？どこよ？」

「霊安室！」

「うっ…；嫌な場所…」

「レイス！早く！！後20分しかありません！」

「わあ…ったよ…！！」

とにかく急いで二人は霊安室へ向かった。

「どうぞ」

看護婦さんに事情を言っ、霊安室の扉をあけてもらい、中へ入っ
た。

霊安室だけあってやっぱり薄気味悪い。

中にはベットが6つくらい置いてあり、うれしいことに人間の亡骸
は乗っていないかった。

ベットの下を見るが、爆弾なんてものは見あたらない。

壁にもない。カーテンの裏にもない。

一体何処に…。

「なあ、ここじゃないんじゃないのか？」

レイスはそう言うが、セシルはまったく話を聞いていない。

何処からか聞こえる爆弾のタイマーの音を神経を集中させて聞き取る。

何処から…？

チツ

チツ

チツ

チツ

チツ　チツ

「上です！点検口の上ですよ！！」

「はいい？！」

点検口と言うのは、病院の天井の隅とかにある四角い正方形のもののこと。

あれはそもそも点検するための入り口で、通常は鍵がかかっているため、あけることは出来ない。

「どうしよう。看護婦さん、鍵ない？！」

「そんな時間はありません！！蹴り破ります！」

「は？！」

何を言つて…と、言う前に、セシルは天井の隅をめがけて蹴りを入れた。

すると無残にも天井の点検口は粉々に粉碎。

この瞬間、レイスはセシルに逆らわないことを心に誓ったとか。

そして、崩れてきた点検口の上から残り18分と表示された爆弾が落ちてきた。

「うおお？！ちよちよちよ…！どうしよう！？解除の仕方知らないよ？」

「…持って海まで走ります。さっき空から見ましたが、この病院の隣に出口のゲートがありました。そこからまっすぐ行けば海がありました。ですから、海へ投げ込みましょう。そうでもしないと、私達には解除も出来ないので人を助けられませんが。」

「でも遠いよ！？」

「飛びます。」

そう言うと、セシルは走って出て行った。

「ちよ…?!」

看護婦に一礼してレイスは追いかけた。

「よお、魔法使いさん。見つけたんだ、爆弾。」

病院の正門をセシルが出たとき、上から声が降ってきた。

それは先ほどの魔法使いの声だった。

「さあ、どうするの?」

「この身を持って処理します。」

それだけ言うと、セシルは背中に蒼いガラスのような翼を生やすと海へ向かって飛んでいった。

「セシル…」

レイスは去り行くセシルの後姿を目で追いかけた。

「アンタ、郵便配達屋のレイスだね。」

いつの間にか後ろに降り立っていた見知らぬ魔法使いはレイスに語りかけてきた。

「アンタ誰だ?」

「俺は下級魔法使いのウエクセル。俺さ、ずっとお前のご監視してたんだ。」

「何?」

「ちなみにあの爆弾だけど、あれはフェイク。セシルをアンタから引き離すためのね。まあ、時間が来たら閃光だけ光るようになってんだ。もつとも、しばらくは気絶してると思うけど。」

「俺に何のようだ?」

「それはね…」

ウエクセルは笑みを浮かべながら、ゆっくりレイスに近づいてきた。

「…君の力を…見てみたかったんだ。」

「俺の力を?無駄だと思うぜ?俺はまだ見習い魔法使いだ。」

「ならば、剣をとりなさい。剣を取り、魔法剣士になりなさい。」

「魔法剣士?」

「僕の剣を差し上げます。レイディアントです。大切にしてあげてくださいね」

ウエクセルはレイスへ剣を投げた。レイスはそれをしっかり受け取ってじつくり眺める。

白く、透き通る刃。デザインは何やら羽のような感じのもの。

振り下ろしてみる。すると以外なものだった。

何だこれ?! 風のように軽い…

ウエクセルは小さめのロッドを魔法で出し、握り締めると、両手を開いて

「さあ、かかって来なさい!!」

と、言つてレイスが飛び掛ってくるのを待っているようだ。

おもしろい… なつてやるうじゃねえか。魔法剣士とやらに。

レイスはレイディアントを握り締め、ウエクセルへ向かつて走つていった。

剣を振り下ろすと、ウエクセルは小さなロッドで受け止める。

「振り方が甘いですよ。そんなんじゃ、ブーツの厚底も切断できませんね。」

「野郎ツ!!」

蹴りを入れて吹き飛ばしたのだが、ウエクセルは綺麗に着地した。

さほど効いていないようだ。

「魔法剣士となるため剣を取ったのなら、魔法を使った技のひとつくらい出してみてはどうですか?」

「魔法を使った技?」

剣を手にして魔法を使う… 俺は魔法剣士になるために剣を取ったんだ。

何か… 魔法剣士つて言うくらいだ。剣と魔法を組み合わせるのか…? でも、どうすれば剣と魔法は組み合わせるんだ?

『へー。魔法つてえのは、体内から魔法の種みたいのを作つてそこから出すようにして発動するのな』

『はい。あ、でも、物質へそのまま種を持ってきて魔法を出すことも出来ませよ。』

『物質に?』

『そう、たとえば…』

そう言っただけでセルは壁に立てかけていたロッドを手にすると、魔法をロッドに発動したらしい。

すると、ロッドは勝手に動き出した。

『こつやって杖に魔力を注いで』意思を持って』と、唱えると、このようにロッドが勝手に動いたりとか。ね?』

分かった!

「こないのならこちらから行きますよッ!!クレイジーコメッ…!!」

「させるかよッ!!」

ウエクセルが唱え終える前にレイスは剣に魔法を注ぎこみ、炎を切っ先に灯すと、炎の剣となったレイディアントでウエクセルの左腕を斬りつけた。

「ヴァッ!!」

ウエクセルの左腕からは鮮血が流れ出す。

「流石ですね…ふふっ。魔法剣士の誕生です。」

左腕を押さえながらレイスを見て笑う。

レイスはウエクセルの後ろに回りこみ、炎のレイディアントをウエクセルの右手首目掛けて剣を振る。

そして、手首に炎が移り、ウエクセルは手首に焼けどを負った。

「…痛いですよ」

焼けどを負った手首を見て、ウエクセルは苦笑する。

「お前がかかって来いッつたんだろ?!」

「それもそうですね…私がまだまだ未熟と言う事ですね。」

不敵に笑うとロッドを両手に持って、レイスに見せるように構えたと、ロッドは一回り大きくなり、刃を出した。その形はまるで

鎌のよう。

「さあ、本気でいきますよ！」

ウエクセルが鎌のような…いや、鎌を振り空中に円を描くと、二人の周りに炎の壁が立ち上った。

「Is the preparation for your mind good？」

The third day【D】

ウエクセルは鎌の切っ先に魔法を集中させて、風をまとわせると攻撃してきた。

「真空双破斬ッ！！」

鎌を振ると、風が物凄い勢いで飛んでくる。

レイスは何とかそれを避けたが、後ろにあった木に風が当たったのを見て驚く。

木に風がぶつかると、その木は当たった所から切断されてしまった。おいおいマジかよ；

「ほらほら、よそ見していると危ないですよッ！！！！」

ウエクセルの方へ顔を向きなおすと、こちらへ向かって刃のような切れ味の風達が完全に姿を見えるようになって飛んできている。

レイスも負けじと魔法で攻撃もする。

奴が風を熾して飛ばしてくるならこちらも熾して飛ばすだけだ！

先ほどより炎を大きくして、ウエクセルの風にぶつける。

すると、強い風がはじけた。

吹き飛ばされるような強い風が。

「くッ……」

「腰が引けてますよッ！！」

ウエクセルが鎌を片手に大きく後ろまで振りながら迫ってきた。

「させるかッ！！」

二人が鎌と剣をクロスさせるその瞬間、声が飛んできた。

「やめませんか？そういうの。僕は、争いは一番嫌いなんだ。」

誰なのだろうか。

よく分からないが、二人は誰かの声で魔法が掛けられたように動きが止まった。

と、言うより、体が動かない。本当に魔法を掛けられているようだ。一体誰だ？セシルじゃないことは確かなんだが……

上から影が降りてきた。

その影はウエクセルの鎌の切っ先に立っているようだ。そちらへ視線を送ると…

柔らかめにツンツン立っている水色の髪の毛がそよ風に揺られている。

手には何やら携帯のようなものを持っている。

「すみません。魔法を掛けて動きを静止させました。」

一風変わった服。どこか子供っぽい服装である。

「アンタは誰？」

かろうじて動く口を開いてレイスは聞いた。

青年は微笑みながら

「シオンです。」

と、言い、ゆっくり舞い降りた。

「だめですよ、喧嘩はいけないと思います。しかも魔法で」

「なあ、ちよっ…魔法解いてくれない…？」

「二人とも、もうしませんか？」

「ああ。誓うから早く。」

「仕方ありませんね。」

二人から反省の色が見えたのだろう。シオンは魔法を解いてくれた。

「ふう…ところで、シオン…さん？ だっただっけ？ アンタも魔法使いなの？」

「魔法使い…と、言うより亡霊ですがね。」

「亡霊？」

携帯を開いて、それをウエクセルに向けるとシオンは微笑みながら言った。

「さて、貴方から仕掛けたこの戦い。意味は？」

「…意味？」

「僕は知っていますよ、貴方が何故この戦いを仕掛けたのか。さあ、この方にちゃんと行って謝ってください。」

シオンはウエクセルの肩を掴み、レイスの方へ体を向けさせる。

「意味…ね。俺はアンタとセシルの力がどれほどのものか知りたかっただけなんだ。」

「力なんか知ってどうするつもりなのさ？」

「…一人つて…寂しいんだよ。」

ウエクセルは視線を地面に落として震えるような声で言ってきた。

「…ウエクセルは俺達と一緒に居たかったの？」

「……………あんた等がこの街に魔法使いとして姿を現すまで、俺は一人で寂しかった…魔法使いはこの都に俺一人で仲間が一人も居ないから、生まれて初めて仲間を見て、うれしかった。そして、他の魔法使いがどんな力を使うのか知りたかったんだ…。」

「なるほど。だからこんなことをしたんですね…爆弾は爆発なんかしませんでした。あれはフェイクだったんですね。疲れました。足がガクガクです。」

声のほうへ顔を向けるといつの間にかセシルが居た。

壁に手をつけて本当に足がガクガクしている。

「セシルッ！」

レイスは今にも倒れそうなセシルを支えに行く。

「ごめんなさい…」

「はあ…もういいですよ。過ぎたことをいつまでも引きずってはい明日が見えません。で、えっと…ウエクセルさん…でしたっけ？よろしければ、私の店で一緒に働きませんか？まだ準備中ですが…。」

フニヤツとした表情で笑うセシルにウエクセルは飛びついてきた。

「ゴメンナガイーツ！！うわああああんツ！！」

「うわっ?!」

ゴツ（頭をぶつけた音）

もちろんセシルはきちんと立てる状態でもないので受け止められずに後ろに倒れた。

苦笑しながら二人を見ていたレイスは、シオンの方へ振り返った。のだが、もうそこにはシオンは居なかった。

「…不思議な人だったな…また、会えるかな…」

The fourth day

さて、ウエクセルも仲間になってセシルの店にやってくるようになりました。

レイスも郵便配達が終わってから店を手伝うハメになりましたが、まあ、それなりに楽しんでいるようです。

では、店を開店する準備をしているようなので様子を見に行きましようか。

薄暗い地下通路にある一軒のお店は一風変わった作り。

ここがセシルのお店。

レイス達は文字の見えなくなってしまっていた看板を下ろして、看板の文字を修正しなおした。

「看板はウエクセルに任せてもいいですか？」

「うん。いいよ」

「それじゃ頼みますね。レイス、貴方は、観葉植物を運んできて入り口と店の窓の近くに置いてくれませんか？私は商品を仕込みますので。」

「ラジャー」

レイスはボードを蹴って中央区の植物店へ向かった。

「すみませーん。観葉植物頼んでいたレイスですけどー。届いてますか？」

大きく育った植物達の葉を掻き分けながら、植物園の奥へ入っていく。

とにかく広い。そして植物が高い。葉がでかい。頼に当たってカユイ…。

ちよつと広いスペースの空間に出ると、店の者が植物に水を与えていた。

「あの〜…」

「あ、レイスさんですね？観葉植物とどいてますよ！ちょっと待って下さいね」

店員は、蛇口を締めホースを置くと、何処か別の部屋に向かった。戻ってくるまでレイスは、ぼーっと、しているつもりだったが

「こんにちわ」

と、言う声で、その選択肢は消されていった。

振り返ると、そこには、奇妙なデザインのギターを背負った黒服のすらっとした男性。

ギターは水色の髪の毛と同化していてちょっと分かりにくかった。

「……こんにちわ……」

「この植物よく育つてると思いませんか？本当、育て方がいいからでしょうね。実は僕も『アイシアの木』の子供を引き取りにきたんですよ。」

「アイシアの木？初めて聞きます。」

「そうですね、あまり普通の人は育成を好みませんし……出回っていることもあまりないですし……何せ、『食人植物』の木ですから。」

「……………はい？」

待て待て待て。え？今なんて言った？あれ、俺もう耳遠くなっちゃった？聞き間違いじゃないよね？何かスゲー残酷な植物の種類が聞き取れたような……

「ですから、食人植物ですって。」

聞き間違え無し！！やばい！！この人頭おかしい！！！！

「や……やめたほうが……」

「あつはつはつはつは！！大丈夫！僕は師匠から小さい頃から食人植物の世話をやらされていましたから！あ、てかあれは師匠がほつたらかしたからか。あつはつはつはつは！！」

やばい。この人絶対頭おかしい！！

果たして今の俺はこの人に向かって笑顔で会話できているのだろうか？

何か引きつった笑顔になっている気がする……。

「お待たせしましたー。こちらですねー！あ、ホーリイさん。食人植物ですね？」

大きな荷台を転がして、観葉植物を二体運んできた店員は彼をホーリイと呼んだ。

「届いてる？食人植物。」

「ああ、届いてるよ。こつちだ。あ、レイスさんも見ますか？結構見られない植物ですよ。」

「え……あ……じゃあ……」

恐る恐るレイスは二人の後ろをついていった。

届いている植物が保管されている部屋へ導かれ、中へ入ると手前の机の上に小さな檻のようなものがあり、その中に植物が入っていた。「あれですね」

店員が指を指すと、ホーリイは檻に近づいていった。

「あれが食人植物？」

と、レイスは店員に聞いた。

外見でしか今は判断できていないが、半分橙で半分黄色の植物。100円均一にこんなのと似た植物を見たことがある。だから、これは普通の植物ではないのか？と、レイスは考えている。

「いや……ホーリイの方を見ていれば分かりますよ。」

「へ？」

そういわれて、ホーリイの方へ目を向けると……

『ギヤアアアアアアアア！！！！！』

何やらマンドラゴラのような悲鳴を上げながら、葉を半分に裂き、そこから口のようなものが見えている植物がホーリイに襲いかかるうとしてくる。

「ホーリイさんッ！！危な……ッ！！！！」

ドゴッ！！

「……え？」

何か見てはいけないものを見た気がする。

普通なら食人植物に触れることもなく人間は怪我を負うと聞いているのだが、ホーリイは襲い掛かるうとした食人植物を殴った。そして更に殴る…まだ何もしていない食人植物がちょっとかわいそうに見える…。

「ちょ…あれ止めないで…いいです」…マジでか…」

「彼は食人植物を操る呪術師らしいんですよ。」

「ハイハイイ？！あ…危なッ！！！！？」

「あ、そろそろ契約を交わすみたいなんで、見てたらどうですか？一体何故食人植物を…疑問と不安が絡み合いながらホーリイの方へ向く。

「…これが…契約…？」

もう脱力感さえ覚え始めた。

ホーリイは食人植物に無理矢理首筋を噛ませ、血を吸わせると、自分も食人植物の葉緑体を吸う。

まるでその姿は吸血鬼のようで…。

首から滴り落ちる血液は綺麗な赤で白い床を赤く染めた。

「契約だ、我の手となり、我の命尽きるまでソナタの力を我に貸したまえ」

そういうと、食人植物は抵抗をやめ、静かになった。

すると、ホーリイは静かになった食人植物を頭の上に乗つけて笑って振り返った。

「契約終了」

「ほら、首をみせて、消毒しなくちゃ。」

「いつもありがとうね、兄ちゃん」

店員が救急箱から消毒液と綿を取り、ホーリイに近づいて、消毒を開始するが、食人植物は店員に噛み付く様子はない。

「食人植物が…噛み付こうとしないなんて…」

驚いてもうレイスの口は先ほどから開きっぱなしだ。

「契約をしたときに、『敵ではない者に噛み付かないように』って、契約したからね。」

「…へ…え…」

もうなんと言つか…何もいえない。

とりあえず、頭を下げてレイスは観葉植物を運びながら帰った。

セシルの店のベルがドアを開けることによつて鳴き出した。

「ただいま…」

脱力感を覚えたままのレイスは重い観葉植物を二体、荷台に乗せて店へ帰ってきた。

「お帰りなさい…つて…どうしたんですか？レイス？」

エプロン姿にモップが非常に似合うセシルがカウンターの奥から出てきた。

「…いや…ちよつと悪夢を見ただけさ…」

「は？…と…とりあえず、お疲れ様。レモンティーとチェリーパイを焼いています、食べてください。ウエクセル！！手を貸してください、観葉植物運びますよー！」

遠くで返事が聞こえる。

だがレイスにその声はとどかない。

椅子に座つて置いてあるチェリーパイをひとつ掴むと口に運んだ。

「…甘え…」

どうやらレイスは甘すぎるのは苦手なようだ。

とりあえず、レモンティーだけいただくことにした。

ずー…

なんだつたんだあの変な人は…恐えし。

あ、でも今のセシルと変わりないのか？でもあれはキノコだ。奴は食人植物だ。

「ヴー…ん…」

眉間に皺を寄せて呻っている。

セシルとウエクセルはそのレイスの様子を見て玄関口でひそひそ話している。

(何があつたんでしようね?)

(失恋ですかね?)

(レイスって彼女いるんですか?)

(知りません。)

(…使えませんね…)

(酷ッ。…でも何かすごいものでも見たんでしよう。普通失恋であんな悩み方はしませんよ。キれるか泣き寝入りして落ち込むかとか…)

(貴方の経験の話でしょう?しかも今の)

(…うるさいです。それに今彼女いるから)

(へー)

だんだん話が変わってきている。

チリンチリン…

「へ?」

突然開いたドアの方へセシルがアホ面全開で向いた。

するとそこには先ほどの植物店にいたホーリイが立っていた。

「えーっと…あのまだ店は…「あーッ!?アンタ!!」…」

セシルの台詞を踏み倒してレイスは叫んだ。

「ここって何の店?」

「…雑貨屋ですが…あの…マジで恐いんですけど…」

「なんで?」

「その食人植物…本当に噛まないんですか…?」

「だから噛まないってばあ。」

「あの…お二人は知り合いですか?」

セシルが二人に問いかけてきた。

「いや、ただの顔見知りだけ。」

見事に綺麗にハモって返事を返された。

「そうですね…あれ、その植物って契約できる種族の奴ですよー

?まだ生きてたんですね。こんなの」

セシルはホーリイの頭の上にある食人植物に気がついて触ろうとす

る。

「おお！知ってますか？」

「アイシアでしょう？これ。懐かしいなあ。昔は飼ってたんだけど、もう今は姿をあまり見なくなっただけだから絶滅したのかと思っていました。」

「今は…って、こいつは1000か990年くらい前に姿を既に見せてなかったんだけど…いたの？」

「いまs「あ。なんでもないなんでもない。ちょっとこの人記憶がおかしいだけだから。」」

レイスがセシルの口を塞いでそう言うと、セシルを部屋の隅まで引っ張って行って、小さい声で話す。

（セシル。お前が言ってるのは約1000年前の話だ。食人植物の奴等はな？60年前くらいまでほとんどいなかったんだよ、で、最近出現し始めたんだ。そしたらお前の言ってること、この時代じゃおかしいんだよ。つじつまが合わないし。お前が過去の人物ってバシたらどうするんだよ？あ？）

（あ…そうですね…ごめんなさい。）

（だろ？）

（気をつけないと私の身が危ないですね）

「あの…」

玄関口でホーリイは正座して待っている。隣にはウエクセルも座つて。

「あ、はい。で、あの、どういったご用件で？」

「あのですねー。手紙…？を、預かって参りました。セシル…さん宛てです。」

「私ですか？」

ホーリイから渡された手紙を受け取ると封を切つて、手紙を開いた。それを見た瞬間、セシルの表情が一気に豹変した。

手紙を持っていた手には力が入って手紙にしわがより始めた。

「この手紙…誰から貰いました？」

「え？あのー…なんか変な仮面つけたピエロ。」

「やはり奴か…」

手紙を捨てると、魔方陣の上に立って、魔方陣を起動させた。

「セシル何処へ?!」

セシルは返事も無く、そのまま魔方陣を通じてどこかへ飛んでいった。

店に残された3人は、まだかすかに光り続けている魔方陣を眺めていた。

The fourth day (後書き)

ちなみに、これは一部、二部という風に分けてあるんです。今は一部目でブログでは【魔法回路】と言う風になっていますが、初期設定では【Starting stories】でした。

The fourth day【B】

魔法回路を通じてセシルは時空の狭間に飛んでいった。

飛んでいった先は暗く、何処までも果てしない夜の闇の中。

地面の砂の中には白骨化した動物の骨であろうと思われるものが埋まっている。

赤い月はその暗い夜の闇に光を落とし、セシルの足元を照らす。

その中に小さな廃墟になった教会があった。

それは地面より高い場所に立っており、普通の人間では入ることができない高さ。

そこへ、セシルは魔法を使って飛び、静かに舞い降りた。

そして、足音も立てず、教会へ近づき、大きな扉を開けた。

入り口から祭壇まではつきりと視界に入る。

「まさか貴方がこの時代に来ているとは思いませんでしたよ、バルド。」

そういつてセシルは祭壇の方へ向かって歩き出す。

汚れた大理石の上を歩くとカツカツカツ…と音が響き渡る。

セシルの視線の先の祭壇には、バルドと呼ばれた黒コートを来た男性が立っていた。

黒いフードを深く被っていて顔はよく見えない。

片手には何やら侵食でもされたかのように奇妙な模様が刻まれている。

一見、タトウーのように見えるが、その様ではないようだ。

タトウーと思われる模様は少し光っている。

「罪の代償が大きすぎたようだ…」

と、バルドは言った。

「目的はなんだ？」

セシルはバルドへ言葉を投げつけた。

ゴーン…ゴーン…

教会のベルが鳴り、しばらくの沈黙が置かれる。

「俺はなぜココに来たと思う？」

「何故でしょう？」

「それは……」

バルドは立ち上がると、静かに言った。

「お前の首を取るためさ……」

そういうと、バルドはセシルの方へ飛んできた。

そして、バルドの拳がセシルへ向かって落とされる。

が、セシルはそれをガードし、蹴り飛ばす。

後方へ飛んだバルドには効いていないのか、また殴りこんでくる。

セシルは拳を受け止めると、片手に持っていた杖の先でバルドの腹を押し、バランスを崩したところで杖で押し上げると、投げ飛ばした。

そして、手を広げると何かを叫んだ。

よく聞き取れないが、おそらく呪文を。

する、みるみるうちに雲行きが怪しくなり、雷が四方八方……めっちゃくちゃに落ちだした。

バルドはその雷をひらりひらりと避けながらセシルの方へ駆けてくる。

ほぼ同時にセシルとバルドは不敵な笑みを浮かべた。

その時、バルドのフードが外れた。

セシルと似ている顔。同じ髪の色。同じ瞳の色。仮面はセシルがつけていた時とは逆……。

まるで兄弟のような……。

二人は拳と杖を交じ合わせ、激しい攻防戦をしばらく繰り広げた。

おそらく、今の二人の速さは他の人から見たら尋常じゃない。

しばらくして、バルドの拳によってセシルの杖は粉碎された。

「……あーあ……杖折れちゃいましたね……」

セシルは苦笑しながら折れた杖を見た。

杖の持つ部分から上は粉々になって地面に落ちていた。

装飾品として付いていた魔法結晶石はダイヤでもないと砕けないのに割れていた。

セシルは折れた杖をしっかりと握り締めると、杖からオーラのような光を出して、棒のように伸ばした。

かと思うと、そのまま途中で曲がり、大鎌の形になった。

「武器は杖だけと思わないでくださいね」

普段あまり開かない瞳孔を開くと、セシルは異常なほど高く飛び上がり

大鎌を振り下ろした。

バルドは避けきれず、右腕を失った。

「ちっ……」

でも腕一本ですんだのならましだった。

セシルの振り下ろした跡の地面は深くエグリ取られていた。

まともに喰らったら腕だけではすまなかっただろう。

ターンをしてバルドもセシルへ殴りかかる。

バルドは動き回るセシルの動きを止めるべく、足を打ち狙う。

「ぐあっ……ッ……!!……!!……!!」

「一本折らせてもらっぜ？」

セシルを押し倒して足を掴むと

「うわあああああああッ!?!?!」

酷い激痛に悲鳴を上げた。

「はっ……脆い。脆すぎる」

「くっ……ふざけるなッ!!」

電撃の玉を手の内に出し、バルドの顔面に叩きつけた。もろに喰らった。

が、痕は残っていない。

「流石俺の……」

「流石私の……」

The fourth day【B】(後書き)

ついに魔法回路編が終わりかけてきました。
早いなぁ〜終わるの・・・

The fourth day【C】

「…なあなんで俺達こんなことになってると思う？誰か解が判るなら教えてくれ」

レイスが半笑いで問いかけた。

「判りませんねー…」

ウエクセルも聞きたいくらいだと顔で問いかける。

「唯一いえるのなら…いきなり場面が展開したってことですかね。

まあ、起承転結で言うとな今は承と転の間ですが…」

ホーリイも苦笑しながら答えた。

何故、三人が訳のわからないことになっているのか…。

それは、今、現実がおかしくなっているからだ。

「セシルが居なくなってるから…二日だけど…さ。これは…あまりにも…おかしいだろう？」

「そうですね。何かテーブルとかがかなり大きく見えます。」

「向こうに小さいドアがあるねー」

「あははははは…」

「笑い事じゃない…ここつてさ…あのかの有名な映画の世界だろ？

確実に。テーブルの上の二つの薬とかまさにアレじゃん。」

レイス達は何故か…ア スの国の ンペーランドに場面転換して

いた。

「おーい…作者。伏せるとこ変じゃねえか？」

大丈夫。（作者の声）

ところで、もちろんこの世界に来たということは、その世界のキャラになるわけですよ…

レイスは何故かうサ耳に紳士的な服。そして時計。ウエクセルはあ

の変な猫のきぐるみ。ホーリイは何故かア ス。

「ホーリイ…お前…実はでしたッ！つてか？！やめてくれ！！」

軽く引いているレイスにホーリイは腹を立てる。

「ホーリイ…お前…実はでしたッ！つてか？！やめてくれ！！」

軽く引いているレイスにホーリイは腹を立てる。

「貴方だつて似たようなものじゃないですかッ！大体それ擬人化でしよう！？一歩間違えたらあの有名な　ゲームのきゃんき…」

「わーーーーーッ！！！！言つな！！勘違いされるッ！！読者様に勘違いされるッ！！！」

とりあえず…混乱しているのですた。

「とりあえずさあ、おもしろそうだから行つてみようよ！」

ウエクセルは困惑を楽しみに変えてドアへ向かつて行つた。

ここにいつまでいても仕方ないので二人も先へ進むことにした。

ウエクセルがドアノブを回すと、ドアノブが喋り出した。

「君達は裁判に来たのかい？今は裁判はあつていないよ。」

「いえ、僕達はこの先に行つてみたいのですが」

「裁判じゃないのなら、左の壁に穴があいているだろう？そこから行きたまえ」

左側の壁には穴が開いていた。

覗いてみるが、先は見えない。

「ふーん…とりあえず行つてみようか？」

「そうだね。」

少々気が進まないが、三人は穴の奥へと足を進めた。

何も見えない暗闇の中、ただまっすぐに歩き続けた。

そのとき、レイスに足元の床が抜けるような感覚が走つた。

「え？」

何が起きたのか判らなかつた。

ただレイスはそのまま、まっさかさまに落ちていった気がした。

とても静かで、何か宙に浮いている感覚。

なんだ…ここは…俺は、どうしてここにいるんだ？

結局お前も魔物かなんかなんだろう？

子供の声…？

化け物が来たぜ！！皆逃げろーッ！！

化け物？一体何の話をしているんだ？

暗闇の中、レイスは足からゆっくり降りた。
不思議。暗闇なのに自分が見えてる。

お前は私の指示に従って動けばいい。ただ、それだけだ
やめてよ父さんッ！

なんだろう…この叫んでる子供の声…何処かで…
とたんに足元から外側へ明るくなっていた。
なんだ…これ…。

気がつけば、先ほどとは違う場所に居た。
なんだか…結構昔の風景のような…なんだろう。

訳もわからず、ただ立ち尽くしているレイスの前で、子供達が集ま
って何かしている。

何をやっているんだ…？

レイスはそつと近づいてみた。

「お前気味が悪いんだよ」

「そつだ。この街から出て行けよ。」

複数の子供に一人の子がいじめられていた。

それを見ていて、レイスは止めようと声をあげるが…

（おいッ！おま…）

え…なんだ声が出ない。

…と…兎に角、止めるのが先だ。

そう思い、子供達の肩を掴もうとするが…

スカッ。と腕がすり抜けてしまった。

（何でだ…！…！…！俺が一体何をしたと?!）

声をあげても無意味。

その時、子供達はいじめをやめて帰って行った。

どうやら、レイスの存在に気がついてはいないようだ。

それを見送ってるレイスの眉間には皺が…

（もし触れてたら…殴る）

声が出ないのと、触れないのと、存在に気がつかない…のダメー
ジが大きすぎたようで、レイスはイライラしていた。

(お前大丈夫か?… って… 聞こえるわけねえよなあ…)

あれ…この子…

「……汚れちゃった…」

水色のズボンを叩いて砂を落とすと、落としていたらしい分厚い本を拾って歩き出した。

そのまま見送ろうとしたが、何だか気になってレイスはついて行った。

子供はずっと俯いたまま早足で何処かへ足を進める。

(何処行くんだ?)

しばらく歩くと歩みを止めて、建物の中へ入っていった。

そこは、教会だった。

(孤児なのかな…)

子供が中に入ると、シスターが「お帰りなさい」といつてきてくれた。

こつゆつのをみると何だか暖かい気持ちになる。

「只今戻りました…」

子供はそう言うときスターの横を通りさつさと地下へ降りていった。

(なんだか可愛げのない子だ…)

ちよつとイライラし始めているが、それでもやはりついて行くのだが…。

子供が地下室の戸を開いた。

(…え…?)

The fourth day【D】

子供が扉を開いた先。

そこには物凄い数の機械が置かれていた。

中央には診察台のようなものが置かれている。

（なんだ…ここ。）

「お帰り。SN2016。」

声が奥からした。

奥を見れば、白衣を来た男性が出てきていた。

他にも多数いる。

その人物を見た瞬間、子供はビクついた。

「只今…戻りました。」

だが、冷静を保って返事を返す。

（SN2016？それがこの子の名前か？）

「今日は何をしていたんだい？」

「…図書館で…本を借りてきました…」

「ほお。どんな本かな？」

手にしていた本は古びた分厚い何かの参考書。

子供が読むような本ではない。

「これは魔法の本だね？」

「はい」

「それじゃあ、後で勉強しようか。まずはいつも通りにアレをしよ
う。」

「…はい」

アレといわれて子供は一瞬ためらった顔をしたが、本を近くの台に
置くとさっさと別の部屋へ行つて、身軽な服に着替えて、外から中
が見える部屋に入った。

（スケルトンルーム？）

中には道着に着替えた男性が何人か待っていた。

(え…まさかこの子今からこの人たちと戦うの?)

まさか…そう思っているとアナウンスが流れた。

『SN2016。それでは、開始する。職員の皆も手加減は要らない。両者覚悟してかかれ。』

そう流れると、男性達は子供に向かって走りだした。

(ばッ!?!?戦わせるつもりか?!止めさせるッ!!)

止めさせようと肩を掴もうとするが、掴めるわけもなく空振りする。

(畜生ッ!!)

悔しい思いをしながらレイスはただ子供の方を見るしかなかった。

ドカッ

(…ええ?!)

子供はなんのためらいもなく男を一人投げ飛ばした。

男は壁に叩きつけられてそのまま気を失って倒れこんだ。

純粋な目で倒れた男をじつと見る目に曇りなどない。

「よそ見をするなッ!SN2016!」

残りの男性達が子供に襲い掛かる。

だが、子供は攻撃をひらりとかわすと、手前の男を投げ飛ばし、続いて来た男を蹴り上げ、最後の一人は腹に思いつきり拳をぶち込んだ。

子供と大人の男のバトルフィールドにはあつてはいけない血痕が大量に零れ落ちていた。

(何だよこれ…これは…まるで…)

殺戮兵器

『よくやった。SN2016。シャワーを浴びて部屋に戻りなさい』
子供は頷くとその場から離れていった。

その後を目で追いながらこの部屋から出て行ったのを確認すると、何やらカルテのようなものに記入し始めた。

そのカルテの名前を記入する欄には『SN2016』と書かれていた。

(この子…もしかして…)

夜。眠りについた子供の隣に座って朝があけるのを待っていた。
すると…

「ねえ…お兄ちゃんは何で僕についてくるの…」

声が出て、驚いて振り向くと、子供が目を開けてこちらを見ていた。

「君、俺が見えてるの?…あれ…声が出る?」

何故か声が出るようになっていて、レイスは驚いた。

「最初から見えてた。」

「じゃあなんで…」

「他の人に見えていないのに、僕が返事を返していると、僕が余計
変に見られるでしょう?」

「…あ…うん。…あ、ねえ。君はなんでここに居るの?この生活の
ままでいいの?」

子供はため息をついて体を起こすと、重そうに口を開いた。

「嫌だよ」

「じゃあ何で…」

「逆らったら殺される」

「…え…」

とんでもない一言にレイスの思考回路は一時停止した。

「一度僕はここが恐ろしくて逃げ出した。だけど、すぐに捕まった
んだ。そしてこの地下研究所に連れ戻されて、僕は罰を受けた。…

恐ろしかった。アレは人間なんかじゃない。悪魔の瞳だった」

「悪魔…」

「そしてこの目はその時の傷跡」

そう言っただけで子供はずっと閉じ続けていた片目を開いた。

「色が…違う?」

「えぐられたんだ。」

なんてむごいことを…

あまりの酷さにレイスは気分が悪くなりそうだった。

「だから、逆らったら殺される。そう思うと、逃げ切れないんだ…」

まだ小さな子供がこんなに過酷な運命を背負っているとは思わなかった。

いや…思いたくなかった。

「…お休み。お兄ちゃん」

「おやすみ…」

誰かに似ている

The fourth day【D】(後書き)

書いてて子供が可愛そうに思えてきました…
さて、そろそろ第一部終了のようですよ？

The fourth day【E】

朝目覚めたら

また違う場所に居た

今度は暗い夜のような世界

でも、子供や大人が活発に動いていることから

朝なんだろうと思う

この世界は陽が差さないのだろう

そんな世界にゆっくりと降りて

レイスはひとつの神殿に向かう

別に歩いているわけではないのだけれど、勝手に場面が進んでいく
よう

開かれていた扉から中へ吸い込まれていく

そして祭壇のような台がひとつ

その上でレイスはあるものを見つけた

(人……?)

黄緑の髪の毛が印象的な青年が瞼を閉じて静かに眠っている

今にも落ちそうな体勢で

(……この人……まさか……)

「……セ……シル？」

「見たんだ」

台の向こう側にあつた大きな像の後ろから一人の人物が出てきた

それは黒いローブを来たセシル

ではなく、セシルに似た人物

「ごきげんよう、この世界以外の住人」

「何？」

「あなたはいつこの街に来たか覚えているか？」

「……それ……は……」

「所詮記憶なんてそんなもんさ。教えてやる、お前をこの街に呼ん

だのは俺とそこで眠るセシルだ」

「呼んだ・・・？」

「おい、セシル。いい加減に起きたらどうだ？まだ充電できないのか？」

(充電？なんだよ充電って、携帯じゃあるまいし・・・)

不思議におもいながらセシルをみていると、セシルはゆっくり起き上がった

「・・・なっ・・・」

横になって寝ていたのでわからなかったが、セシルの体には多くのコードがついていた

そして今まで隠していた瞳が見えていた

その瞳は恐ろしいものだった

赤い瞳の中に黒い悪魔の模様

つまりその瞳が現す意味は・・・

セシルは悪魔

「私はいままで嘘をついていました・・・レイス。私は悪魔です人間でも天使でも守護神でもなんでもない・・・とても悪い悪魔です」

そして背中に見せた蒼いガラスのような翼

そう、俺は気が付かなかった

あれが悪魔の証であることを

「セシルは俺のコピーなんだ、つまり『レプリカ』」

と、セシルに似た奴が言った

レプリカ？

と、言うことは、奴が本当のセシル？

で、セシルが偽者？

やばい複雑になってきた・・・

「彼が本当のセシル。そして私はセシルのレプリカSN2016。名前なんてない。あるのは製造番号だけ」

「嘘だ・・・俺は信じない」

「悪い子ですね、レイス。信じてくれないなんて。怒りますよ？」

「・・・っ・・・」

「思い出したか？」

「思い出した・・・けど、よく分からない・・・」

「つまり、こうゆう事さ、俺達は本の世界のこの中にお前を呼んだ。そしてお前がいた世界での記憶を取り除いていた」

「何のために？」

「さぁ・・・俺は呼び出すのを手伝っただけだ、呼んだ理由はSN 2016に聞け。」

そういうと、本物のセシルはさっさと帰ってしまった

「私の力だけじゃ貴方を呼び出せなかつたんです。私は本物と比べて力が半分弱くなっていますので」

「・・・で？」

「理由・・・ですか・・・それは貴方があちらの世界に帰るときに教えます。その時まで待つてくださいませんか？」

「・・・いいよ。だけど、教えてもらいたい。」

「・・・なぜ私がレプリカとして生まれたのか、ですか？」

「ああ」

そして今回りだす。本当の運命が

The fourth day【F】

「研究者達の実験のせいです。まあ、ドッペルでも作ってみたかったんでしよう。天才は時に何を考えているのかわからない。彼らは自分の理論を通し、それを正解と思い込み、勝手に物事を進める。でも、そのせいで苦しむレプリカが居るということを考えてもらいたかった。」

「じゃあ幼い頃のセシルはなんで生きようとしていたんだ？」

「……死ぬことは簡単です。でも、生きることの方が難しい。と、いいますが、私たちレプリカにとって、生きるのは簡単ですが、死ぬことが難しいのです。」

「？」

意味がさっぱりわからない生きるのは簡単じゃない。死ぬことは難しくくない。

これは理解できる。

でも生きるのは簡単で死ぬことは難しい。

これは理解できない……。

「私たちは別に何もしなくても生きていけます。ただ、人間とは違い悪魔であって化け物です。

人より生命力もあり、寿命も長い。蘇生能力もある。だから、簡単には死ねない。」

「……それは、間違ってるよ。セシルは悪魔……なのかもしれない。でも、化け物じゃないし、俺は少なくともセシルは人間だと信じている。ウエクセルとホーリイも。ホーリイはまだあつたばかりだけどそうじゃない？」

「……本当にそうでしょうか……？」

「え……」

いつもとは違う何かセシルから感じられた

それはとてつもなく冷たく重いもの

レイスはその威圧感にそれ以上近づけなかった

ただ、判ったのはセシルが必死に震えを止めようとしていること
だけど、セシルは抑えきれずにいた

「セシル・・・なあ、ここって俺達がさっきまでいた街とは違う空
間なんだろう？帰ろう。皆まってるよ。」

「わ・・・たし・・・は・・・あ・・・あああつ！！！！？？！
！」

急に苦しみだし、セシルは自分を抱くような形になってそのまま倒
れ、呻いた。

「ちよ？！セシル！！！」

その時、魔法回路とは違う魔法陣が大理石の床に浮かび上がり、四
方から電流が流れて中央に集まった。

その電流はダイレクトにもセシルに当たって。

それがおわっても、まだ魔法陣は浮かびあがっている。

そして、最終的にはセシルの動きを取れなくさせる。

「セシル？！」

「結局は呪われている。ならいつそ、このまま・・・」
続きを言う前にセシルは意識を手放した。

「セシル？え・・・や・・・やだよ・・・嘘だろ、セシル・・・」

「無駄だ、そいつはもう死んだ。自ら死の魔法を使ったんだからな」
声がる方へ目を向ければセシルに実に良く似た人物。

「・・・自ら・・・？」

「セシルはずっと死にたい死にたいといっていた。」

「何で・・・」

「何故レプリカ達が自分の存在に嫌になるか教えてやろう。本物が
いるとな、レプリカは本物の部品か、実験道具にしかならなくて、
生きる意味がないからだよ」

「生きることに意味がない・・・？」

「・・・そんなことない・・・セシルツ！！！！！！！！俺は現
実から逃げるお前を許さねえッ！！！！起きろッ！このヘタレ野

郎！！」

なんだかむかついてきて、俺はセシルを床にぶつけてやった。

「・・・お前、セシルを戻したいか？」

「出来ることならな・・・」

「なら力を貸してやる呼び戻せ。まだそいつは魂が体と繋がっている。しいて言うなら仮死状態だ。セシルの夢の中へ行ってセシルを連れて帰って来い。」

「・・・わかった」

こいついい奴なのか悪い奴なのかわからねえや・・・

「いいか野郎、制限時間は約20分。20分経過したら戻れなくなるから気をつける。」

そう言つて本物のセシルは踵を鳴らして不思議な形の魔法陣を出した。

それはセシルの魔法陣とは違って絵のような魔法陣

「乗れ」

魔法陣を示していつてきた

俺はセシルを抱えて、魔法陣の上ののつた

「闇よ、我を今闇から解き放ち光の輝きを与えよ。」

あれ・・・聞いたことある

確かセシルが言っていたっけ・・・

『属性転換』

魔法使いにはそれぞれ属性がある

『たとえば火の魔法使いがいるとしましょう、で、その魔法使いが水属性の魔法を使いたいとなる。その時属性転換します。だけど、これはやってはいけません。体内にある魔力を全て消費して倒れてしまつと言う報告が多々あります。時には死を・・・』

「！！！！！！駄目だ！セシルッ！！」

「安心しろ、少し寝たらすぐ回復する。行つて来い、そして連れ戻せ・・・」

セシルの夢の中へ移動した瞬間、本物のセシルが倒れていくのが見

えた

お前は一体何なんだ・・・？
なんで俺に手をかすんだ？

The fourth day【G】

『ねえ、おじちゃん。この丸い落書きなあに？』

『ははは、落書きか。それはね、落書きじゃないんだよ？これは魔法回路と言ってるね、とてもありがたいものなんだよ。』

『まほーかいろ？』

誰？誰の声？子供・・・？

何故かレイスは宙に浮いていた
自分でもわからないが

これがセシルの夢の中？・・・と、言うことはこれはセシルの記憶か何かか？

暗闇の中、歳をとった男性と黄緑の頭をした子供が会話をしている
おそらく、この子供がセシルだろう

『さて、できた。どうだい？』

男性が子供に差し出してきたのは一本の黒い日傘。

ああ、そっぴやセシル日光駄目なんだっけ・・・

『わあ！！すごいすごい！！直った！！ありがとおじちゃん！！』

『よかったな。』

『うん！』

子供が手にしている傘はあまり良いものではなかった。

黒いはずの生地がところどころ赤黒く染まっている。

『それにしてもどうしてセシルはその傘じゃないと嫌なんだい？』

男性が聞くと、はしゃいでいたセシルの動きが止まった。

『大切な人から貰ったものだから』

とても悲しそうな表情

俺はこのことを生き返っても聞かないほうがいいだろう・・・

彼を悲しませてしまいたいそうだから

気が付けば

セシルは一人傘をさして何処かの庭で遊んでいる
(よし、セシル。起こしてやるからな)

レイスは気を引き締めてセシルに向かって行った

「セシル！」

「・・・おにいちゃんだれ？」

聞きたくない言葉だった。

セシルは小さくなったただけではなく

レイスのことを覚えていない

この声はセシルに届くのだろうか

「聞いてセシル。セシルは俺に魔法教えてくれたよね？つか、まだ
教えてる途中だよな？ねえ、ちゃんと最後まで俺に魔法を教えてよ。
途中で放りださないで。」

「ま・・・ほう？何で僕がおにいちゃんにまほうなんか・・・」

「覚えてない？いや、覚えてるよ。絶対に。心が覚えている。」

「やだ・・・止めてよ」

嫌がるセシルの目尻にうつすら涙が見え始めた

だけどレイスは止めようとはしなかった

セシルの肩を掴んで続けた

「止めない。止めないよ？俺が止めると思ってるの？止めねえよ。

お前が俺のこと思い出してセシルに戻ってくれるまで。」

「僕はセシルだよ」

「違う、お前は俺の知ってるセシルじゃない。俺の知っているセシルは魔法道芸師で、俺の時代に1000年前から勝手にやってきて勝手に住み着いて、いつも変なことばかりやってるいい大人だよッ！」

「うるさいですよッレイスッ!!! 眠れないじゃないですかッ!! 安眠妨害罪で訴えますよッ!!!」

「アンダア?! 安眠妨害罪って?! 訴えられんの俺ええええ?! . . .
つて. . . え?」

目の前に居たはずのセシルは子供からレイスの知っている大人のセシルに戻っていた

「. . . セシル. . .」

「まったく、貴方という人は何でこんなとこ. . . うわっ?!」

レイスはこの時初めて涙を浮かべたのかもしれない

「レイス?」

レイスは、自分でも判らないが、何故かセシルを自分の腕の中へ引き寄せていた

何か映画で男の人たちが感動のシーンで抱き合う気持ちがよく分かった

「良かった. . . 忘れられたのかと思った. . . 忘れられてたら、引っ叩いてでも記憶掘り返させてやろうとおもったよ. . .」

「. . . え. . .」

セシルは血の気が引く感覚をこのとき初めてじっくりと味わった気がした。

「セシル、帰ろう! 急いで帰らないと魔法が解けたらもう帰られなくなっちゃう!」

「あ、はいッ. . . でもどうすれば. . .?」

「. . . やっぱお前もわかんない?」

軽く絶対絶命じゃねえ? 俺達

顔を上げなくてもいいから
安心して欲しかったから
だから一方的に喋り続けて

レイスはその時セシルはやっぱり大人だなと改めて思ったらしい。
いつも笑って、変なキノコの研究とかしてたけど
やっぱりこうやって人のことをちゃんと考えて

「やっぱり、セシルは変。」

「・・・そうですか？」

「そうだよ・・・」

「ふふふッ。かもしれないですね。貴方がそう言うのなら・・・」

「なあ、セシル。」

「？」

「お前は どうして1000年後の世界に来たんだ？」

どうせ答えてくれないのだろうと思ってた

セシルはいつだって秘密を隠すから

だけど今回だけは答えてくれた

「未来に世界があるのなら1000年後どうなっているのか知りた
かったって事がひとつの理由でもあるんですけど、もうひとつの理
由は・・・自分を否定しないでくれる人と出会いたかったか
ら。過去の世界じゃもう修正をするのは無理で、私は孤独に生きて
いくのが耐えられなくて・・・」

セシルの瞳からぼたぼた涙が落ちていくのが見えた
だけでも、レイスは何も言わないで聞いていた

「だから未来へ来ました。そして出会いました・・・貴方と、皆さ
んと」

踵を鳴らしても

もうお家へは帰れない

そんなことは

もう既に判りきったことだ

だけどそれでも子供は願ひ続けた

未来へ

The fourth day【H】(後書き)

Magica=Online=第一部

【魔法回路編】終了ですッ!

・()。。()。()。()ノイエーイ

続いては第二部!!

The fifth day

あの後レイスとセシルは現実に戻ることが出来た。
おそらく本物のセシルの魔法だとは思っただが・・・。
気が付けば夢の世界に入る前の建物の中だったが、そこにはセシルに似た彼の姿はもう無かった。

それから数日後

The fifth day

「レイス、違います。この魔法はこうじゃなくて・・・ここを・・・で・・・なんですよ」

「ああ、じゃあここは・・・で・・・なんだ？」

「そうです!」

店を営業しながら人が来ない時間、二人はこうして魔法の勉強をしている。

まだまだ修行の身だが、レイスもだいぶ魔法を使えるようになってきた。

「・・・そろそろお昼休みを終了させて、お店再開しましょうか。」

「オツケエエエエイ!! よーし! 魔法も仕事も頑張るぞお!!」

「その息ですツ!」

こうして二人のいたって普通な生活が始まる・・・はずだった。

カランコロン と、ドアのベルが鳴り、お客が来たのかと思えば、そこにはホーリーの姿があった。

なにやら急いできたようで、髪の毛は乱れていた。

「どつたの? ホーリー。」

「はぁツ・・・聞いてよお、レイス! セシル!」

ホーリーは何やら腹立てているようだ。

とりあえずホーリイを椅子に座らせて、二人は話を聞いてあげた。

「変な人がいるんですッ!!!」

「え？何？変態につけられてるの？」

「違うっ！その・・・説明が悪かったです。あのですね、この街の下層下部区域の住宅街に『マザー・エンジェル』って研究所があるらしいんですけど、そこに少年を捕まえているらしんです！」

「下層・・・かぶ？」

セシルは不思議そうに問いかけてきた。

それもそうだ、1000年前には下層下部なんてなかったから。時代が変われば街の風景だって変わる。

「あのね、セシルの時代には無かっただろうけど、この都は3つの区域に分かれるんだ。俺達がいるこの区域が『中層』。で、空に浮いている区域が『上層上部』。で、中層の下にある区域。つまり、地下が『下層下部』。人口が増加したから300年前くらいに2つ区域を作ったんだって。」

「へえ・・・じゃあ、この下に下層下部があるんですね。この下で人が暮らしているんですね？」

「そうそう」

「一見、普通の都に見えるが、意外とこの都は普通じゃない。」

最先端技術の都とも言われるほどあるから、まあそうなんだろうが。

「なんかよく分からんが、とりあえず下層下部に行ってみようか。セシル。」

「はい、では、今晚」

夜8時あたり。

レイスとセシルは下層下部へ降りてきていた。

「ここが・・・下層下部？」

セシルは目の前の光景に目を大きくして興味津々にレイスの隣でみ

ている。

下層下部。

そこは、新技術が辺り一面に普及していて不慣れな近未来の姿。

上へあがる階段の部分は乗ると動き出す仕組みや、転送装置で別の街へと転送できる装置がそこらじゅうにある。

立ち並ぶ店はほとんどが電化製品。

携帯屋なんて特に凄い。

たいていの携帯は開いてそこに画面とボタンがあると言うタイプ。

それが今の技術で出来る最高のレベルだが、下層下部の携帯は一味違うようだ。

見本の携帯を見てみると、それは携帯の形ではなくブレスレット。

そのブレスレット状の携帯にはめ込まれている宝石らしきものがボタンらしく、押してみるとフォログラフィー状の画面が宙に浮き出してくる。こういったものは中層や上層上部では販売されていないため、ここでしか手に入らない。

「おい、セシル。あんまり動くんじゃないぞ？」

「迷子にはなりませんよ。」

「違う違う。下層下部は確かにいい様にみえるかもしれないけど、麻薬でおかしくなった奴とかいるんだよ。」

「ああ・・・そうなんですか。それじゃあ気をつけないといけないですね」

「そうそう」

そう言ってセシルは気を引き締めると、歩き出した。

「ここが下層下部、住宅街。」

「ここが住宅街？」

そこは鉄の塊で作られた集合住宅。

大きさはかなりのもので、住宅街エリアに何十軒もたっていた。

おそらく一軒に約70の部屋があると思われる。

夜道に使われるであろう街灯は奇妙な光を放ち、夜の住宅街を映し出していた。

(・・・これが・・・未来の姿)

セシルはこの光景に少しゾツとしてきた。

「ほらセシル、何ぼつとしてるの？行くよ。」

レイスがセシルの手を引つ張つてどんどん住宅街に入っていく。

なんだか怖くなってきたセシルは思わず反射的にレイスの手を握り締めていた。

「？」

レイスは不思議そうにセシルを見ていたが、セシルは黙って付いてきていたので何も語り掛けなかった。

「うわぁ・・・おっきい・・・」

セシルはその建設物の大きさに驚いた

高さは一体どれくらいあるのだろうか？

星まで届きそうだ。

「これが下層下部の研究所・・・マザー・エンジェル。」

The fifth day (後書き)

仲間がどんどん増えていきますよ！

第二部【自由への招待状と記憶の呪縛】！！

The fifth day【B】

二人はマザー・エンジェルの研究所へ入って見学を始めた

案内人のお姉さんの後ろをひよこのようについていき、しばらくするとガラスの壁の部屋へ来た

「ここからは第1～19研究室です。一本道なので迷いませんよ。それから二階からは研究員の個人的な研究室ですが、勇気があるならどうぞ。」

「勇気があるなら・・・あはは・・・」

ちよつと見たくないなあ・・・と二人は思った。

なんだか恐ろしいものを想像してしまったから。

とりあえず、二人はザツと一階の第1～19研究室を見ていった。

DNAだとか遺伝子がどうのこうの・・・クローン実験理論がどうこう

「なあ、セシルはここに入れるんじゃないのか？キノコで」

「馬鹿を言わないでくださいよ・・・無理ですって」

俺は入れると思うぞ、セシルよ（作者の声）

一通り見終えて、二階へ行こうとしたとき、二人は地下への階段を見つけた。

行ってもいいのか・・・少々迷ったが好奇心には勝てないもので・・・

ふたりは地下へと降りていった

地下には誰の姿も見えず

ただ長い長い廊下が続くだけであった

歩いて歩いても先がなかなか見えてこなかった

それから数十メートルくらい進んだ頃、やっとひとつの扉が見えてきた

その扉には『E I T O』と書かれているだけで、他には変わったところはない

ただ、上で見てきた扉とは違って白くてシンプルなものだ

「・・・なんだろう、E I T O って？」

二人は疑問に思いながらもその扉をそつと開いた

するとそこには・・・

「人？」

色々とコードにつながれて立ったまま寝ている・・・いや、静止している青年がいた。

水色が銀髪か・・・不思議に輝く髪の毛は彼自身の魅力を引き出すようで。

二人はその青年に近づいていった

「・・・寝てる・・・のかな？」

寝ているとすれば凄い。立ったままで寝るなど、大抵の人間は出来るはずがない。

「血行がいいようですから、生きていますのしょうね」

そうセシルが言って、青年の目の前に立ったとき

ぱちっ

「・・・」

「・・・」

目の前の現実に一瞬硬直して、セシルとレイスは顔を見合わせてからもう一度青年の方へ目を向けなおした
なぜなら

「・・・」

迷いも無いような目で青年が目覚めて、こちらを凝視しているから

（ ）（どうしよう・・・なんて言い訳をすれば・・・）

内心二人は焦っていて、何も言い出せず、ただこちらも見ているだけ
青年はずっと何も喋らないでこちらを凝視し続けている

「・・・せ・・・セシル・・・」

「な・・・ななんですか？それ・・・レイス??」

パニック状態にある二人は、もう噛み噛み。

その様子を見ていた青年は急に明るい表情をして口を開きだした。

「セシルさん・・・と、レイスさんですか？」

「「え?! あ、はい!」」

二人は意気投合。

「初めまして、エイトです。」

「えいと・・・? え、じゃあ・・・扉の『E I T O』って・・・

君の事?」

レイスがそうといかけるとエイトは微笑んでうなずいた

「はい、おそらく。」

「おそらく?」

「だって僕外は見たことないので

「へ?」

その言葉の意味がわからずにいる二人の後ろで扉が開いた。

振り返った二人は硬直。

そこに居たのは恐ろしい表情をした職員。

「お客さん、見学範囲に地下は存在しません。出ていってください。」

「

「・・・すみません。」

二人は職員に押し出されてその部屋から出て行った。

「・・・あれ、あの人は?」

部屋からまだこちらを見ているエイトを見ながらレイスは職員に問

いかけた。

「あの子は実験サンプルです。」

サンプル・・・

その言葉にセシルの表情が悲しそうな・・・怒っているような
なんともいえない表情になった

The fifth day【C】

店に帰ってからセシルは本を片手にずっと考え込んでいた。

最初は本を読むつもりだったらしいが、おそらく先ほどのエイトのことが気にかかって意識が本から離れているのだろう。

レイスが見る限りでは、先ほどから微動だにしていない。

「……………」

セシルの目の前で手をかざしてみるが、まったく気づいていないようだ。

「……………はあ……………セシルッ！」

「え……………あ、はい。何ですか？」

やっと気が付いたようで、ハツとしたようにこちらを見る。

「どうした？……………エイトのことか？」

「……………どうして……………実験サンプルにされるんでしょうか……………」

エイトさんは、悲しくないのでしょうか？私は……………悲しいと思う。

「

……………なあ、じゃあエイトのどこを見てみるか？」

「エイトのト」？」

レイスはセシルを連れて自宅の自室へ招待した。

レイスの部屋はシンプルなもので、必要最低限の家具しか置いていなかった。

机にベット。何やら難しそうな本が棚に並び、部屋の中央に小さな台があり、そこに手紙が山積みになっている手紙のほとんどが開けられてはいないようだった。

「こつち」

本棚を動かして隠し部屋へ入るように手招く。

導かれるまま奥へ入っていくと、そこには……………。

「これは？」

虹色に輝く鏡が宙に浮いていた。

「これを使ってエイトのいる施設内へ飛べるんだ。次からは正面から入れないだろ？だからこつから。」

「これは・・・移動装置みたいなものですか？魔法回路と似た？」

「そうだよ。ただ、正確に飛べるところが魔法回路とは違うかな。」

ある場所のある位置に飛びたいと念じればそこに飛べる。」

「・・・なかなか興味深い。それより、これでエイトのところへもう一度行きましょう。」

「ちよいまち。」

レイスはセシルに止まるよう指示すると、机の上から本棚の上に幾つかケーブルでつながれていたパソコンを起動させた。

何をしているのかわからないセシルはただ、レイスの背中を眺めてまっていた。

しばらくキーをカタカタ鳴らしていくと、画面に施設内の様子が映った。

「レイス・・・それは・・・」

「施設内にさつきつけてきた隠しカメラの画面。職員が居たらいけないでしょ？施設内に元々付いているカメラはエイトの部屋には着いていなかった。だからエイトのところにつけてきた。」

「よく観察してますね、あんな短時間で。」

「・・・そういうこと昔からしてたから。」

レイスが一瞬怪しい微笑みを浮かべた。

セシルはその微笑に寒気を覚えたが、あえて何も聞き返さなかった。レイスが、いつものレイスとは違う雰囲気を出していたから。

「さて、エイトの部屋には鍵がかかっているみたいだね。部屋にはエイトしかいないみたいだし。じゃあ、行こうか。」

「はい」

鏡を通して、二人は施設内のエイトの部屋に飛んだ。

急に部屋に現れた二人にエイトはすぐに気が付いたようだが、驚きもしない。

むしろ、喜んでいる。

「また、お会いしましたね。」

微笑んでこちらをみている。

「エイトさん・・・どうしても聞きたいことがあってこのたびまたお会いにきました。」

「・・・なるほど。ここにいて、何か楽しいのか。実験サンプルになっけていて平気なのか。ですね？」

セシルは感じ取った。エイトはセシルの考えていることを・・・心を読んでいるのだと。

エイト。

彼は何か超越した存在なのだ。

「ここに居ても平気です。実験は痛いですが、皆優しくしてくれますし。でも、外の世界は見てみたいものですね。」

「外には出してもらえないのですか？」

セシルが聞くとエイトは、なんともいえない表情で答えた

「・・・出てもいいの？」

「自分の気持ちに間違いがないと思うのなら、やりたいようにやってもいいと思いますよ。」

エイトはしばらくの沈黙のあと口を開いた

「・・・僕は・・・」

その時、扉が勢い良く開いて職員の怒声が響いてエイトの言葉はかき消された。

「お前ら！何をしている！！」

いかにも恐そうな警備員と職員数名。

背後には数体の警備ロボット。

「「やっべ。」」

レイスとセシルは息を飲んだ。

出口は完全に包囲されているため出れるわけがない。

鏡から来た入り口を開いて帰ったとしても、追いかけてくるであろうと察知したから。

お縄に捕まるしかない。そう考えてしまったとき、二人の前にエイトの姿が。

「止めて下さい。二人は僕のお友達です。二人を捕まえたり、殺したりするようであれば、容赦はしません。正当防衛としてあなた方を撃ちます。」

子供のような表情で笑っていたエイトの顔は凜々しい表情をして、まるで別人のようだ。

声もトーン低くなっている気がする。

「しかし・・・」

職員が何か言う前にエイトが言った。

「そこをどいてください。」

「しかし・・・」

「どいてください」

「でも・・・」

「どいてください」

「・・・」

エイトの押しに負けて、入り口を塞いでいた警備員達はそこから離れた。

「さあ、二人とも。行きましょう。」

満点の笑みでエイトは二人の方へ振り返った。

その笑顔は、いままで二人に見せた中でも一番の微笑みだったのかもしれない。

「僕は『やりたいようにやります』。自分の意思で決めるんです。これからを。」

The fifth day【D】

三人が施設の入り口から出たとき、警報が鳴り出した。

「これは・・・」

「さっきの人達は、僕の命令には絶対に従わないといけないうって決められているんです。でも、上のタクミさんに言いつければ、おそらくタクミさんが「保護しろ」と言うでしょう。こんどはその命令に彼らは従います、そうすれば僕の命令は全て無効なんです。だから、早く逃げましょう。」

「残念。エイト君、君はやはりまだ子供だな」

エイトの後ろには、一人の男性がいた。

手にしているキャノン砲はエイトの背中に突きつけている。

「・・・タクミさん・・・」

「駄目だよ？君はここから逃げられないんだから。」

するとエイトは振り返り、どこから出したのかはわからないが、蛍光色の黄緑の短剣を手にし、タクミという男性に向けた。

「やるのか？」

「ええ、あなたが私を殺すことが出来るなら」

「言っただな？」

「言いましたよ？」

「手加減はしない・・・行くぞッ！！」

タクミは、迷わずにエイトにキャノンを放った。

エイトはそれを避けてすばやい動きでタクミの頭上へと飛び上がる。勢い良く短剣を振り下ろすが、タクミはひらりとかわした。

「どうした？それで終わりか？」

「まだまだ」

エイトはくすくす笑うと、短剣の刃を下に向けて踊りだした。クルクルと回り、不思議な歌を歌う。

一体何がしたいのかレイスは訳もわからず見ていた。

どうやらセシルは気が付いているようで、ただじつと見ている。タクミは笑ってキャノンに向けたとき、異変は起きた。

「これは・・・！」

突然辺りから光があふれ出したと思ったら、エイトの上にあつまり出して、ひとつの塊になると、タクミに向かって飛んでいった。

「ちっ・・・超能力か・・・ごさかしい」

「だって僕は・・・宇宙人ですから・・・人間じゃないですから。」
エイトはとても悲しそうな表情をしてみせた。
すると、それに気が付いたのかセシルが喋りだした。

「いやいや、君のような存在が一人とは限らない。私も、もう人間じゃないでしょうね・・・私は千年前の時代から魔法を使って来た者です。もうこの時代じゃあ墓の下ですよ？」

セシルは手をかざしていつの間にか辺りを囲んでいる職員にむける。それを見ただけではピンと来ない職員は不思議そうにセシルをみる。
「そう、この世には他にもエイトと同じような人が存在するんだ。
俺だって・・・その内の一人さ。今はまだ言う勇気がないけどね」
レイスはポケットから小型PCを出すと、ディスプレイを被って手を動かし始める。

「一人じゃないよ」

二人の言葉にエイトは驚いたようにただ立ち尽くしている。

「レイス。行きますよッ！」

「OK」

セシルは魔法で氷の矢を生み出すと、職員達に向けて投げ飛ばす。もちろん、威嚇射撃なので急所には当たらないように。

職員達は始めてみる魔法に驚いてあわて始め、手にしていたキャノンを打とうとするが・・・

「キャノンが動かない?!」

「へっへっん 残念でした そんなもの俺のPCでデータベース

上に侵入してキャノンに指示出す機械を眠らせたんでv」

PCを片手に得意げに言うレイスは少し高い街灯のうえでキーボードを滑らせて行く。

「小僧ツ!!!」

「あ？小僧じゃねえよ？え？名前？名前はね・・・」

レイスは地面に降りると職員の名前の目の前まで目に見えぬ速さで踏み込み

「芥川 光太郎って言うんだ」

と、言つて職員に重い一発を食らわせて吹き飛ばした。

「レイス。誰ですか？芥川光太郎って？初耳ですよ？」

「あはははははv俺は昔から芥川光太郎だが何か？まあ・・・そんなことよつか・・・丸腰同然の職員の皆さん？どうするおつもりで？」

レイスが聞くと、職員達は懐から小さなナイフを取り出して構えた。

「あら～・・・物騒なエモノだしちゃつて・・・」

「レイス、中級魔法はもう覚えましたか？」

「おう！大体覚えたぞ」

「それじゃあ対属性同士の属性合体しましょうか。貴方の属性は光なので私が闇を担当します」

「了解！」

そう言うと、セシルは手の中に黒い光を集め、レイスは白い光を集める。

そして、だいぶたまつたところで・・・

「喰らえツ！」

二人は同時に光を放った。

それは空気中で交わりあい、大きな竜のような姿となって職員達に向かつて進んでいく。

その時だった

「待て!!!」

初めて聞く年老いた怒声にレイスとセシルの魔法は一時停止し、二人は声の聞こえたほうへ目をやった。

するとそこには・・・

「長官・・・？」

エイトがつぶやいた。

「お前ら何をやっているのだ。騒がしいと思ってやってきたら、エイト保護のためか？くだらん。エイトがここから出たいといっているのだ、出してやれ。これも学習の一環になるだろう」

「長官・・・いいんですか？だって・・・僕の研究を始めたのは長官じゃ・・・」

エイトが驚いて問いかけると、長官は申し訳なさそうに言った

「すまなかつたな、エイト。私はまだ知らない生物がどうゆう風に生きているのか、どうゆう能力を持っているのかしりたかった・・・だからお前を捕らえて実験サンプルにしてしまった。すまなかつた・・・」

「じゃあ・・・実験はもういいんですか？」

「ああ、もういい。お前の好きなように生きる」

まさにドラマの最後のワンシーンを飾るようなこの場面に職員達は見とれていた。

長官はエイトから目を離すと、セシルとレイスの方へ振り向き近寄ってきた。

目の前までくると長官の凛々しい顔が良く見える。

「君たちが・・・エイトを連れ出そうとしたのかい？」

（「ヤバイ・・・怒られる・・・いや、怒られるとかそんな優しいものじゃないな・・・」）

「はい・・・」

「名前は？」

「・・・セシルです。こちらが・・・レイス」

セシルが紹介をすると、長官の大きな手が二人に向かって出てきた叩かれると思った二人は思わず目を瞑ってしまったが、次の瞬間頭にくるはずと思われる痛みがない。

むしろ、こそばゆいと言うか・・・頭上でごわごわした感覚。

恐る恐る目を開ければ・・・

「「え？」」

長官の大きな手は二人の頭の上に乗っかって、優しくなでていた。子供じゃないんだけど・・・と思いつつも、齒向かう勇気が無いので停止。

「エイトを頼めるか？」

聞こえてきたのは意外な言葉。

その言葉に一瞬驚きはしたが、もちろん返事は・・・

「「はい」」

The sixth day

その日、レイスがセシルの店に行くときセシルは居なかった。ただ、どこからか歌声が聞こえる。

誰もいないはずの地下通路。

そこに響く綺麗で繊細な歌声。

「誰の声？」

エイトがセシルの店の二階から降りてきて、レイスはセシルのことを尋ねたが、エイトが起きたときにはもう出かけていたらしい。

前もって朝食は作り置きしてあったらしい。

「多分中層と上層には出て行ってないと思うんだけど・・・光が差す内は上に出れないし・・・」

「どうしてですか？」

「なんかね、紫外線浴びると発作的なの起こすんだって。」

「大変なんですね、セシルさん。」

「だよなあ・・・てかさ、俺さつきから気になってただけだよ・・・」

「この地下通路に響く声は何？」

「・・・さあ・・・。」

レイスは声が聞こえる方へエイトを連れて進んでいった。

薄暗い地下通路では床がほとんど見えないため、キャンドルに火をつけて進んでいった。

「レイスさん、そのキャンドル短いけど大丈夫？」

「安心して。これは魔法キャンドルだから大丈夫。ほとんど減らないから。」

「そうなんですか？」

エイトは興味有りげにキャンドルを見てくる。

カツン・・・カツン・・・

と、レイスのブーツが地下通路に響く。

エイトの足音は不思議なことに響かない。

エイトも厚底ブーツを履いて、同じように隣で地面に足を付いているはずなのに。

「広い……ですね。地下通路」

「だねえ……俺もここまで進んだのは初めてだよ。そもそもここは立ち入り禁止って言われてる場所だったから入ることなんて今までなかったしねえ……」

今まで気づかなかったが、奥に進むほど壁の装飾がアンティークなデザインになって行き、細かいものであった。

それからしばらく歩くと、キャンドルの光もいらなくなるほどの淡い青色の光が奥からあふれてきていた。

その淡い光に向かって進むとドアのないゲートがあり、ゲートをくぐるとそこには……

「わあ……」

「すごい……」

何処まで広がっているのかわからないが、そこには古代都市だったと思われる古い建物が広がっていた。

道という道らしきところは、ほとんど淡い青色の花が咲きほこっていて、神秘的だ。

「あ……聞こえる」

ゲートをくぐってから誰かの歌声が近くなってきた。

『 I want to heal you

t h e r e . . . 』

透き通った声で優しいもの。

それは建物の密集している方から響いてくる。

「エイト、ここで待つ？行く？」

「……行きます。」

少し足の踏み場が危ないので一応聞いてみたが、エイトはそれでも行くというので「わかった」と、一言言つと先へ進んだ。

道は一本道。

迷うことは無いだろう。

足元に広がる花は、可愛そうだが多少踏んでしまつことになる。

「なんだか・・・可愛そう」

「そうだね」

一段一段ゆつくり上がつてゆく。

少しづつ古代都市の頂上へと近づく。

それは天国に続くような気さえた。

階段を登り、広場に出て、道を通り、また階段を登り、住宅街だつ

たと思われる場所を通過して、

また階段を登る。

そして頂上手前の大きな門。

それは亀裂が走り、半壊していたが、古代都市だと思われるこの都

市の何か重要なものだといふ感じが直感した。

でも今はまだ、これが何なのかわからない。

多分今はまだ知る必要はないのではないのだろうかとも思う。

『 I want to heal you

I wish your safety every night

there・・・

It please be healed

Please rest your wing

I continue singing for you

「・・・セシル?」

ゲートの向こう。広がる青の中。

その中に黄緑色の彼。

レイスの呼びかけにゆつくりと振り向く。

優しい笑顔で

「おはようございます。いい天気ですね。心地いい朝です」

「お前・・・日の光・・・」

「この光は特別なんです。だから私にも平気なんです。」

振り返った彼の顔にはチャームポイントとも言える眼帯はなく、その下に隠れていた赤い瞳が優しくこちらをみている。

何処からか吹き込んでくる風は、僕らを包み込むようで。

「今のはセシルが歌ってたの？」

「え・・・聞いていたんですか・・・？」

「ねえ、もう一回聞かせてよ？」

エイトと共にセシルの隣に座ってそう言うとセシルはもの凄く恥ずかしそうにしていた。

「嫌ですよ・・・」

「えーッ！いいじゃん！！」

「僕も聞きたいです。セシルさん」

「駄目。絶対駄目。もう歌わない。」

「恥ずかしがり屋だなあ、セシルは」

何故だろう・・・？

ここまで時間がゆっくり流れているような気がするの。

レイスは出会った人々と、仲間の皆と一緒にこのままずっとこの時が続けばいいのに、と考えてしまう。

「ところでセシル、ここは？」

「・・・千年前の都市の跡です。まあ、もう千年前にはほとんどの人が中層に移り住んでいましたが・・・それでもあの頃私たちはどうしてもこの年を守りたかったんです。だからここは立ち入り禁止区画にされたんです。今も、昔もね。」

「何か守らなきゃいけないものがあつたのか？」

「この都市そのものが守らなくてはいけないものなんです。ここには、『リゲル』がいるから。ねえ、リゲル？」

セシルが空に向かって話しかけるようにすると、何処からか声が響いてくる。

『お前は今でも番人をするのか？セシル・・・』

「誰ッ?!」

姿もわからない相手の声にレイスとエイトは驚きの声をあげる。

『私はリゲル……【この都市そのもの】だ。そしてセシルは千年前の【門の番人】。』

「門の番人？」

「つまりね、この都市自体にリゲルと言う人の魂が組み込まれていて、この都市を守るシステムみたいな方。そして私は【この都市で最も大切な門】を守る番人。その門がアレ。」

セシルが指を差した先には先ほどの半壊しているゲート。

「でもあれはもう……」

「いえ、あれは【外郭】です。その中身ですよ。中身は門の下に存在します。」

『ただ、もう誰もアレを欲しがらぬ奴は私はいないと思うがな……もう誰も必要としないだろう。世界は新しい技術を手に入れて進化した。』

「ですよね」

セシルは立ち上がって服を叩く

『帰るのか？』

「ええ、そろそろ店を始めないと」

『そうか、ならまた歌いに着てくれ。』

「ふふつ。まあ、今度はレイス達には来ないように来ましようかね」
セシルは二人を置いて階段を駆け下りていく。

「あ、待てよッ！」

「今度は僕らにも聞かせてくださいよッ!!」
レイスとエイトもセシルの後に続き階段を駆け下りていく。

I want to heal you

I wish your safety every night
here……

It please be healed

I c o n t i n u e s i n g i n g f o r y o u . . .

P l e a s e r e s t y o u r w i n g

The sixth day (後書き)

息抜きの話 & amp; #9825 ;

The seventh day

瞳ノ奥、キミハ誰ヲ想い ソコマデ頑張ロウトシテイルノ？

薄レカケタ ソノ記憶ノナカ タダノコツテイルノハ

誰力ガモツテイタ大切ナ ノート

深夜。中層部セントラルシティ【幻想の館】の屋上。

「さあ、ホーリイ。【ノート】はどこだ？」

全身黒服に包まれた20代前後の男女が拳銃を向けてホーリイに詰め寄る。

『ホーリイ……』

「大丈夫だよ、アイシア。恐がらないで。」

頭の上に載っている食人植物が恐がらないようにホーリイは声をかける。

それを見た黒服の彼らは威嚇発砲してきた。

「おい、話をきいているのか？」

「……渡さないならどうするの？」

「殺す」

「じゃあ殺せよ、ほら、トリガー引け。そしたらぼっくりだ。」

「ふざけやがって……ノートは何処にあるのか言えッ！！」

「いゝや〜」

くすくす笑ってホーリイは拒否する。

その時、黒服集団の中からひとつの発砲音。

ホーリイはそれを受けて屋上からまっさかさまに落ちていった。

「……なんてことをするんだ。カレン」

カレンと呼ばれたのはダークブルーの短い髪をした男性。

「……俺は別にノートは欲しくない。アレを使ったところで【歴

史は変えられない】からな」

「やってみないとわからないだろう?」

「ばかばかしい……」

カレンはさっさと建物から降りていった。

『ホーリイ、ホーリイ！目を覚ましてええ。』

アイシアが葉っぱの手でホーリイの頬を叩く。

「痛い……」

『ホーリイツ』

「うーん……危なかったねえ……血のり仕込んでおいてよかったです力モ。」

ホーリイが着ているロングコートの下からは仕込んで置いた血のりの袋。

ホーリイは間一髪で銃弾を避けていた。

『どうするのぉお?これからぁぁ』

「……うん。時間の問題だね。いつまでも逃げ切れるわけじゃないし」

『何処へ行くのぉ?これからぁ。』

「仕方ないね」

ホーリイは口笛で魔法のじゅうたんを呼ぶとそれに乗って夜の闇へ溶け込んでいった。

「おっはよぉ……セシル……」

気力のない声でレイスはいつものようにセシルの店に入ってくる。

「おはようございます。」

セシルとエイトは振り返りもせず、レイスが持ってきてくれたテレビを凝視していた。

(えー……?!いじめ?!)

「め……めずらしいね、何見てるの二人共？」
「事件です」

レイスも二人の肩越しからテレビ画面を見つめた。

『昨夜、【ノート】を探している黒服集団に街の住民、24名が銃弾で撃たれて重傷を負いました。急所は外されており、命に別状は無いとの事です。』

「ノート？何でノートなんだ？」

たかがノートのために人を撃つなんて、何て馬鹿な考え方してるんだ？と、レイスは思った。

まあ、確かに。ノートごときにムキになるのだったら、普通拳銃なんて持たないだろう。

最低でも殴り合い程度だと思われる。

「うーん……ノート……ノート……何処かで聞いたことがありますね……」

テレビを見ていたエイトがノートについて思い出そうとしている。

「黒服集団……ノート……銃……夜……。闇……。？」

何か喉元まで出掛かっているんですけどね……
「うーん、うーん。と、うめきながら必死になって考えているエイトにセシルが「お店そろそろ開きますよ」とか、レイスが「おーい」と問いかけても反応はない。

そして開店時間、とりあえず仕方ないので階段に座らせておいた。それからしばらくしてお客が入ってくる。

女性客が多く、小さな小瓶やオルゴールを見て、「かわいい」とか「綺麗」とか言い、店内を見回る。

そしてセシルに話しかけてなんだか和んでいる空気が香る。

レイスはレイスで他の客を接客している。

「魔法薬はどのようなもの？」

「えっと……気つけ薬と、回復薬を。」

The seventh day【B】

（もしかしたら、ニュースで言っている【ノート】と言うのは・・・）
嫌な予感を頭の中でぐるぐる駆け巡らせながらエイトはセントラルを駆け抜けていた。

向かい来る人を掻き分けて、多分、最大の力で。

（あんなの黒側に回ってしまったら・・・大変なことになるッ！！）
坂を駆け下りて大きなビルが建つところへ出たとき、目の前に現れた光景。

それにエイトは驚いた。

「！！！」

「あつけないなあ・・・君達から喧嘩売ったんじゃないの？ふふ・・・ふふふ・・・」

そこには返り血を浴びてクスクス笑うホーリイがいた。

エイトがいる場所から結構あるが、エイトの場所からでもホーリイが狂っているのが分かった。

おそらく、ホーリイに襲い掛かって来たであろう人間は半殺し状態にされて、地面に転がされていた。

「あははははははははははッ　ねえ、もつと遊んでよおー・・・」

（何・・・あの人・・・狂ってる）

恐ろしいものをみたような目で・・・いや、恐ろしいものをみてエイトは立ち止まってしまっていた。
足がまったく動かない。

（駄目です・・・逃げないと・・・）

逃げないと思っても、それでも足は動かない。

動け。動け動け動け！！

逃げる、逃げるんだ。でないと殺される！

その時、エイトとホーリイは目が合った。

「！」

「……君はだあれ？」

壊れたホーリイが、エイトの方へ向き直った。

エイトの方からは見えなかった右手には白いノート。

しかし、それは返り血で赤く染まっていた。

「そのノートは……！」

ノートの存在に気が付いてエイトが目を見開く。

「ん？ああ……これ？君もこのノートが欲しいの？あげないよ？」

「え……？欲しい？」

「お前も姉さんの敵だッ……！」

ホーリイは魔法を発動し、辺りに結界を張ったようだ。

「どうやら【生きて返さない】と言うつもりだろう。」

「……セシルさんと同じ力ですね。」

魔法の使えないエイトは超能力で対抗する。

セシルとは違う言葉を唱えてホーリイは氷を出現させてエイトへ向けて投げ飛ばした。

氷はそのまま真っ直ぐに飛んできてエイトの顔を狙ってきていた。

エイトはそれをギリギリのところで避けて、超能力を発動する。

地面がデコボコと動き出して足場を悪くしていく。

しばらくそれが続いて、一瞬動きが止まったかと思ったとき、ホー

リイの立つ真下から岩が突き出てホーリイを襲った。

「……ちっ……」

ホーリイの右足から血が流れている。

おそらく、長くは持たないだろう……。

そう思っていた時魔力の塊がエイトに目掛けて直撃して弾けた。

「ガハッ?!」

魔法は超能力と違う点がある。

超能力は【存在するもの】を中心として動かしたりするもので、動きが目に見えるが魔法は【存在しないもの】をその場所に突然出現させるものだから、動きが目に見えない。

それに、エイトは魔法など初めて見たものだから、どうゆうものかさえもわからない。

つまり、不利な立場におかれている。

（・・・これは・・・僕の方が危険ですね・・・）
薄い笑みを浮かべてエイトは立ち上がった

（楽しくなってきたかも・・・）

The seventh day【C】

「貴方のお名前は？僕はエイトです」

「ホーリイ・トワイライト」

「そうですか」と、言うとエイトはホーリイに向かって刃のような風を投げ飛ばした。

その風の力はかなりのもので、地面はえぐられるように傷つけられた。

向かってくる風をホーリイは蝶のように飛んでかわすと業火をエイトへ向けて放った

「!」

エイトがいた場所はほぼ炎の海と染まった。

「・・・もう終わりですか・・・」

つまらないという表情でホーリイは炎を見つめる。

炎の中からエイトが出てくる気配などない。

人影が見えることもない。

（死んだか・・・）

と、ホーリイが気を抜いたときだった。

「死んだと思った？死んでないよ？」

背後から声が出たと思い、ホーリイが振り向いたら

エイトはホーリイの背後にスツと舞い降りて吹き飛ばした。

（何?!）

ホーリイが気が付いたときにはもう地面がすぐそこに見えていた。

（この子供・・・魔法が使えないようだが、一体・・・）

「さあ、ここからが本番です。僕を楽しませてください。」

そういったとたん、エイトの周りで小さい光がぼつぼつと現れだす。そしてかすかな風が地下から吹いてくるようにエイトに不思議な力

がこみ上げてくる。

（何なんだ・・・この子供は。ただの子供じゃない・・・）

「デイ オーディア スイテュン ヤ ワイル ウス バイレア」
この世界で古代から現代まで使われている言葉とはまったく違う、
聞いたことのないような言葉をエイトは発した。

すると二人のいる場所が氷のフィールドに変わるように、建物に氷
が張り付いていく。

「これは・・・何故？魔力などまったく感じられないのに・・・エ
イト、貴方は何故魔法が使えるのです？」

「・・・【昌霊術】魔力を持つ昌霊と契約をして魔力をかりる術さ
すると、エイトの後ろから氷の昌霊が姿を現す。

水色の肌に蒼い瞳。

冷たい存在。

「アンタ、エイトが普通の子供じゃないと分かっていたみたいだね。
特別に教えてやるよ。」

この子はね、この星の人間じゃないんだよ。消滅した惑星の唯一の
生き残り。つまり、宇宙人なんだよ」

（宇宙人？！この子供が・・・？どう見たって普通の子供・・・）
「やだなあ・・・スノウ。別に言わなかったっていいではないですか。」

「いいだろ別に。最終的にばれるんだし」

スノウとエイトの水色と白い腕が絡まりあい、エイトの中にスノウ
が溶け込む。

「僕に力を貸して、スノウ」
「ほどほどにな」

エイトが完全にスノウを取り込むと、エイトの髪がだんだんと水色
に変化していく。

そしてスノウとエイトは合体する

【融合】

辺りに霧が広がって行く。

冷たい冷気を感じながらホーリイはその中で二人を見た。

「・・・なッ・・・!？」

「さあ、ゲームはこれからです」

冷たい目をしたエイトの腕は氷の刃へ変わっていた。

「行きますよ・・・氷牙真空波斬ッ!!」

エイトが氷の刃と化した腕をホーリイに向かって振り下ろす。

ホーリイはエイトの目にも留まらぬ速さに付いていけず、胸から腹にかけて血を噴出した。

「!!!!!!」

「どうしました？腰が引けてますよ？」

痛みなどわからない

どうして切れているのだろうか？

どうして？

「ああ・・・そうか・・・」

「・・・ホーリイさん？」

エイトがホーリイの様子がおかしいのに気が付いて動きを止めた。どうやら正気に戻ったようだが、何かがおかしい。

「これは・・・」

そう・・・あの時の・・・あの日の・・・

『ホーリイ！こっちよ』

『ほら、いつまでもグズツてないで』

『見てみて！今回は上手く出来たんだ！ホーリイのおかげよ』

巡る 巡る 駆け巡る

記憶の中を走っていく

亀裂が走る トランプが散らばる

炎が燃える みんなが消えてゆく

『このノートを持って逃げて・・・』

誰だったかな

あの日僕にこのノートを預けた彼女は

名前が思い出せない

噛み切る

The seventh day【D】

「今、セシルが魔法で回復させてあげてるからとりあえず一安心かな・・・」

エイトは倒れたホーリイを背負ってセシルの店まで戻ってきた。

エイトがつけた傷は軽傷なのですぐに癒えるらしくその件に関しては大丈夫なのだが・・・

「ホーリイがこれくらいの傷で倒れるわけないもんなあ・・・」

レイスがエイトの傷の手当をしながら言う。

「・・・おそらく、彼の記憶の一部は消えています」

階段から降りてきたセシルが二人に言った。

「消えている？」

「はい。失礼ながら彼の記憶を覗かせてもらい、過去の世界まで行って観察してきました。どうもエイトの話からすると戦いとは関係のないことをホーリイが思い描いていたようなので。それで、覗いてみたんですが・・・」

ホーリイがまだ高校生ぐらいのころ、一人の姉がいました。

その姉は唯一の肉親で、共に孤児院で物心ついたところから暮らし始めていた。

彼らにとって孤児院は【ホーム】であった。

二人は特に仲が良く、いつも一緒にいることが多かったともいう。

親、家族は居ないが、それでも彼らにとってはシスターや孤児院の仲間は本当の家族であった。

この生活に十分満足して幸せいっぱい二人に悲劇は突然襲い掛かった。

姉は孤児院に来る際、白いノートを一冊持ってきていた。

それには大切な弟であるホーリイにさえも触れさせなかったという。

ある日、ある黒服集団が来て、【ホーム】を全焼させた。目的は姉の持つ【白いノート】。

そのノートを手に入れるために黒服集団は手段を選ばなかった。

ホーリイがいつものように時計台のおじさんのところから帰ったときには

ホームは完全に焼けきっていた。

「ねえ・・・さん・・・みんな」

ホーリイは必死に姉とみんなを探し出した。

だが、ほとんどの者が事切れていた。

その中で聞こえたかすかな声。姉の声だった。

「姉さんッ!!」

「ホーリイ・・・お願いがあるの。聞いてくれる？」

「わかった・・・わかったから」

「このノートを・・・ね、守って欲しいの・・・このノートはね・・・私には、仕えないけど・・・ノートが主人を選んだとき、このノートの力が・・・起動しはじめるの・・・。でも、もちろん主人以外は使えない・・・けどね。これ・・・悪い人の手にあつたら大変なの・・・だから・・・絶対に・・・守って・・・」

「・・・わかったよ」

そしてホーリイがノートを手にした瞬間、ホーリイの記憶から姉の存在は消えていた。

ホーリイはノートの主人に適合してしまっていたのだった。

姉は伝えていなかったが、ノートの主人となってしまうと、主人。

つまり所持者の記憶から代価として、大切な記憶を消し去るのだった。

「この人誰・・・？」

つまり、今のホーリイには姉の記憶など残っていない。

「そう・・・なんだ」

何だか難しい記憶だったのでレイスは顔をしかめていた。

「それじゃあ、記憶の傷がうずきだした・・・と、いうところですかね？」

「おそらく。気が狂ってしまっていたのも、かすかに覚えている姉との記憶を呼び起こそうとしていたためにおこった記憶の暴走みたいなものでしょう・・・あっ・・・」

思いつきりセシルはこけた。

「おいおいまたかよ」と苦笑してレイスがセシルを起こす。

「回復魔法はちよつと負担がかかるもので・・・」

「で、何でノートが狙われるんだ？」

レイスはお茶を入れなおしながら二人からの回答を求める。

「それはですね、あのノートが【人の人生を書き換える】ノートだからです。」

「書き換える？」

「はい。あのノートにたとえばaさんが死んだから生き返らせたいなどと書いたら、aさんは生き返ったり。お金持ちになりたいと書いたらお金が。要するに【欲】のためのノート。」

「欲のため・・・ね」

「そんなの間違ってますもん。自分の人生は自分で決めなくちゃ・・・」

「だ・・・」

二階ではホーリイが目覚めていた。

ノートを手にしても決して開けず、ただ見つめているだけ。

「・・・誰だっけ・・・」

アナタハ ダアレ？ ナンノタメニ ボクニ コノ ノートヲ
アズケタノ？

スベテハ ユメ？イツワリノ キオク？

ボクノ シカイ ニ ハイルノハ アノヒミタ アカイ ホノウ
シロイ ユキ ノ ウエニ アカイ エキ

タ ダ ミ ツ メ テ イ ル ダ ケ デ

The seventh day【E】

「ところでエイト。貴方はよく、魔法を使えないのに魔法使い相手に戦えましたね」

不思議そうに問いかけてくるセシル。

もちろんセシルの時代では異世界との交流などないので宇宙人なのはない。

「あ、はい。僕は魔法は使えないので超能力で戦うしかないんですが、昌霊と契約すると僕が武器化した魔法使いとして魔力を一時的に使用が可能になるんです」

「昌霊？神何かですか？」

「はい、まあ・・・属性的神みたいなものですかね。僕が今契約をかわしているのは氷の昌霊と雷の昌霊だけですが・・・出てきてください。スノウ。ヴォルト。」

すると背後にうっすらと霧と小さな静電気。

そこからスノウと、電気をパリパリと放つヴォルトが出てきた。

『私がスノウ』『・・・ヴォルト』

ヴォルトはスノウのように人型ではなく、光の塊だ。

「はあ・・・これが昌霊ですか・・・興味深い。」

『黄緑の兄ちゃん、あんたも昌霊に属する存在じゃないのか？粒子反応が感じ取れる』

「・・・はあ・・・まあ・・・そうですが」

ちよつと返答に困りながらスノウからの質問に答える。

「・・・？」

もちろんレイスとエイトは意味が分かってない。

その時階段から駆け下りてくる足音・・・ホーリイだ。

片手にノートを持って、乱れた服のままセシル達を凝視して立ち止まった。

「おはようございます。ホーリイ。気分はどうですか？」

相変わらずなセシルの台詞など無視してホーリイはちかよってくるセシルに詰め寄る。

「え？ええ？えと・・・何でしょうか？」

「ここにいちや駄目なんだ・・・どこか・・・広くて・・・魔法を使っても住人達に被害の出ない場所は？」

「えと・・・多分10番街郊外のスラム・・・？」

「・・・ありがとうございます・・・」

そう言い、ホーリイはセシルの店を出て行った。

「え・・・？！ちょ・・・レイスツ！エイトツ！追いかけますよ！」

「はい」「おう」

一体何のつもりなのか。

ホーリイは何故そこまでして戦おうとするのだろうか。封印するか、燃やしてしまえばいいのに。

10番街郊外スラム

今はもう誰もいない郊外。（作成中）

ホーリイはそこに現れた。

白いノートを片手に・・・

「わざわざ自分からお出ましとは・・・手間が省けたよ、ありがとう・・・」

上から声が降ってきたほうへ顔を向ければそこには黒服集団。

建物の上に並んでいると【悪】っという感じがいい感じにでている。

その中にはカレンもいた。

ただし、瞳は冷え切っている。

「カレン、ホーリイを殺せ。」

そう命令されたカレンだが

「嫌」

と命令を拒否した。

するとカレンの頭に銃口が向けられ ガチャツ と音が鳴る。

「殺すぞ」

殺意のこもった仲間からの声などカレンの耳には届いていないようで・・・まるで、今すぐにもそこから飛び降りそうな様子だった。「やめる、今はそいつよりホーリイだ」

リーダーらしき人物の声に全員が従い、カレンから目を離してホーリイの元へ降りてきた。

カレンは建物の上に腰掛けて、様子を見るようだ。

「さあ、ホーリイ。そのノートを俺達に渡すんだ」

リーダーの一人がそう言って拳銃を向ける。

しかし、それぐらいでホーリイは引かない。

「嫌です」

「渡せ、さもなければ殺す」

「嫌だといったら嫌です！」

「なら死ね。」

その言葉と同時に銃声が響いた。

「え・・・エイト？」

ホーリイは目の前にいる人物に驚いた。

なぜならそこには、エイトが氷の壁を作って銃弾を塞いでいるから。銃弾は氷の壁に突き刺さり、動けなくなっている。

「ホーリイさん殺すなんて許さないからね、リーダーさん。そしてカレンツ！手伝って！」

エイトは上の方に座って見物しているカレンに声をかける。どうやら知り合いのようだ。

「・・・うん。なにすればいい？」

カレンがそう返事をする。と黒服集団は一斉に振り返る。

「カレンツ！お前歯向かうつもりか？！」

「・・・だつたら何なの？殺すの？その鉄の塊で？出来るものならやってみなよ」

その言葉と同時にカレンの黒い瞳が赤くなる。

すると、黒服集団の持っていた拳銃がドロドロと溶け始めました。

「なッ……?! 一体……カレン、お前は何者だ?!」

「……宇宙人。人間なんかじゃないんだよ。」

The seventh day【F】

カレンとエイトは超能力を解放状態にして最大限の力で黒服集団を倒していく。

魔法と違い、どちらかと言うと物理系攻撃。

そして存在する形をそのままぶつけるのだから魔法より痛い。

黒服集団は全員足場を崩されて全滅していった。

「カレン・・・君は何でこんな奴らと？」

エイトは一息ついてカレンに聞いた。

カレンも呼吸を整えてからエイトの方へ向き直り、答えた。

「僕の能力は知ってるよね？ツエリのアンティーク社でナビゲーターのしてたときなんだけどね、

たまたま敵のコンピュータ内でキャッチしたんだ『ホーリイと言う人物の

ノートが狙われている』って。だから、この組織内に潜り込んで、先回りしていたんだ。」

「で、予知能力で僕がここに来ることが分かっている、落合ついでにここをバトルフィールドにしたんだね？」

「そうゆう事。」

クスクスと二人で笑っていると、そこにセシルとレイスがやってきた。

「大丈夫ですか?!」

「!ホーリイツ!!」

完全に腰を抜かしている状態のホーリイをレイスは抱き起こす。

「大丈夫か？」

「・・・はい・・・二人が助けてくれました・・・」

「エイトとその子が？」

「わあ!二人とも強いのですね?・・・えと、そちらの方は？」

「彼はカレン。僕とおんな宇宙人だよ。」

カレンはエイトに紹介されて、セシルたちに向かって頭を下げる。つられるようにセシルも頭を下げる。

「さあ、皆さん、一旦ここを引きますよ。倒れている彼らが目覚めたら面倒です。」

セシルの指示に従い、全員はセシルの店に戻った。

「ところで先ほど倒れていた彼らは？」

セシルがエイトとカレンにたずねた。

「うん、あの人たちはね、ホーリーさんのもっている『ノート』を奪おうとした悪い人たちなんです。」

ホーリーさんの持つノートには特別な・・・不思議な力があるんです」

「不思議な力？」

「はい、そのノートは、『人の時を操る』ノートなんです。つまり、人生を書き換えることが出来る。」

他人の人生を己の手で地獄へ導くこともできるし、天国へと導くことも出来る・・・。

使い方ひとつで、『救い、滅びどちらにでもなる』ほどすごいものなのです。」

セシルは納得したように「なるほどね・・・。」といい、ホーリーのノートを開いてみる。

しかし、ノートはまっさら。

「なにも書かれていない・・・なるほど」

「なにがなるほどなんですか？」

不思議そうに今度はエイトとカレンが尋ねてくる。

「ノートがまっさらと言うことは、『私はこのノートを使いません』と、言うことでしょうか？」

その言葉を聞いて二人は「あっ！！」と声を漏らす。

「心配していたけど・・・ホーリーさんは・・・」

「うん。ホーリイはこのノートを誰にも渡す気もないし、使う気もないよ」

セシルがそう言うと、二人は笑顔にさらに花を咲かせたようにして笑うと二階で既に寝てしまっているホーリイの元へ向かう。

「あ、ホーリイ寝ちゃってるんだから静かにね？」

「うん、今日はホーリイさんと寝るーッ！」

「あの、僕もよろしいですか？」

階段を上りかけていたカレンもセシルに許可を求める。

もちろんセシルからの返事はOK。

それを確認してカレンもエイトに続いてホーリイの眠る部屋へ向かう。

「まだまだ二人も子供だな」

レイスが紅茶をセシルに差し出す。

セシルはそれを受け取りうれしそうに笑う。

「ふふふ、まだ今はソレくらいがいいんですって。・・・それより、ホーリイさんが目覚めたらさぞびっくりするでしょうね？」

「起きたら餓鬼の顔が両脇にあったりしてな。」

その夜、エイトとカレンはホーリイを挟むようにして、寝ていたとか。

タダミツメテイルダケデ

タダキミノトノヤクソクヲマモリツツケ

ボクハタイセツナオモイヲミウシナツテイタ

デモ

イマ ミツケタンダ タイセツナモノ
コレカラハ コノヒトタチモ マモツテイクヨ

The eighth day

『君は何のために生きている?』

ヴェクセルはそういった

『貴方は一体何?』

ホーリイが続いて言葉を発する

『僕らにとって貴方という存在は認識できるもの?』

エイトとカレンも言う

レイスは軽い微笑みをして外を眺めていたが、突如血まみれになり

悲しそうな表情と言うか・・・血の気のない表情で言った

『貴方にとつての終わりは何・・・?』

『残されるのは何?怒り?悲しみ?それとも存在した証?』

そんなもの残らないよ。貴方は存在しないのだから。

僕らにかかわっても意味なんてないんだよ?

僕らは消えていくのだから。』

『愚かな人だ。何をそう深く考える?戻ればいいだろう?』

死にたくないのなら!!!』

『苦しめ!嘆け!叫べ!その身が朽ち果てるまで!』

「.....せし.....セシル!」

誰かの呼びかけにセシルは目を覚ました。

まだはつきりしない視界の中に写る明るい色の髪の毛。

ああ、笑顔がよく似合う彼だ。

「・・・レイスですか。どうしました？」

「いや、すごい苦しそうにしてたからさ、危ないかなって思って。」

「・・・私、何か言ってますか？」

「ん？いや、何か・・・『消えないで』とか。」

だめだ・・・思い出せない。

いや、思い出したくない。

何か恐ろしい夢だった気がするから。

「さて、セシル。街へ久々に買出しに行かないかい？」

「そうですね。エイト、カレン、行きますよ。」

「「はい」」

まるで家族のように皆と過ごせる生活が

このまま続けばいいのに。

中央区の方で日用品を買い集めて、噴水のある広場で一休みしていると、

ちよとそこにヴェクセルがやってきた。

「あれ？皆さん買い物ですか？」

「ヴェクセル！久しぶりっ！そうなんだ、買い物。ヴェクセルは・・・

・あれ、見たことない服着てるね。」

「え？ああ、僕、休日以外は学校に行ってるんです。2番区内にあるウィルド魔法学院。」

「ウィルド魔法学院？ああ、最近出来た？」

「はい。元々僕の種族がルーンを使う魔法使い達だったので、僕もルーンを使えないといけないから。」

「あれ・・・ヴェクセル幾つ？あの学校確か、18歳未満・・・」

「16です。」

「飛び級ーッ?!」

「いえ、願書で歳を鯖読みさせただけです。」

やってはいけないと思うのですが・・・;

「そっかあ。まあ、頑張れよ!!」

「はい！」

楽しそうにそう話していると、ヴェクセルの後ろから声が聞こえた。

「そうか、お前か。ルーンの術師ネーゼの息子は。」

「！！貴様ツ？！」

驚いたような表情でヴェクセルは振り返った。

ヴェクセルの振り返った視線の先には、一人の男性がいた。

だらしのなく黒いスーツを着て、右耳には多数のピアスをしていた。

「もちろん俺が何者か分かるよな？いままでも散々追いかけれまわったんだから。」

「・・・D・K。」

「そう、D・K。俺はその一員、バニツシュ。」

気軽な雰囲気の彼はにこにこ笑いながらそう言った。

「D・K？」

レイスは不思議そうにヴェクセルに問いかけた。

無論、皆もヴェクセルの方を伺う。

「D・K。通称Doll Killer。彼らの言うDollとは、ルーン魔術を使う一族のこと。古来より僕達ルーンの一族は避けられていた存在。なぜなら、当時僕ら一族の住む村の近辺にいた人間は僕らを【悪魔】と呼ぶほど恐れていたからね。」

「そう、ただ、ルーンを覚えるのは別に問題は無い。【ただの人間】ならな。しかし、ルーンの一族に覚えられると厄介なんだよ。お前らは手加減を知らない。元々暴走本能が強く、ただ、人を殺すことしか知らない野蛮な一族だからな。」

「お前ツ・・・！！！」

レイスが怒りながらバニツシュに吠えかかろうとしたが、ヴェクセルの無言の静止に止まった。

何かもの言いたげそうな顔をしていたが、レイスはおとなしくヴェクセルに従った。

The eighth day (後書き)

第3部【嘆きの前兆】編です

ついにやっと3部目です
やりました!!

The eighth day【B】

「関係のない方々まで巻き込むつもりで？」
困ったような表情でヴェクセルは笑った。

しかし、声は怒ったような声で、ヴェクセルの魔力が上昇し、付近の空気に威圧感が走り出す。

「巻きこまねえよ、安心しな。さ、来いよッ!!」

そう言い、バニツシュは空高く飛び上がった。

少し遅れてヴェクセルも飛び上がった。

「教えてやるよ、力の差を」

「ひゃー。恐いねえ、ネーゼの息子は」

「・・・ハガル!!!」

ヴェクセルがルーンを叫ぶと、近くにあった建物の一部が分裂して、バニツシュに飛んできた。

バニツシュは軽くそちらを見ると、さらりとかわした。

まるで、蝶のように軽々と身を宙に舞わせて。

「あははっ そんなんじゃ駄目だよっ。」

そう言つてバニツシュは宙で身を翻し、すばやく銃を手にしてトリガーを引いた。

銃は二弾型の銃で、破壊力のある弾丸。

それが、ヴェクセルの心臓を貫いた。

宙に飛び散る赤い花びらは雨のようにセシルの顔に落ちてきた。

ヴェクセルは体を支えることが出来ないまま落下してレンガの地面に落ちた。

「ヴェ・・・クセル。」

そこにある肉体は奇妙な方向へ腕が曲がっていたり、多量出血してりしていた。

「・・・駄目だ。事切れている。」

レイスがヴェクセルの脈や呼吸などを確認してそう言った。

そつと持っていたハンカチを顔の上に乗せてあげた。

エイトは「せめて綺麗にしてあげないと」と言つてカレンと一緒に反魔法で傷を消していく。

魔法で呼び戻せる魂は、命の鎖がすぐに切れていない人の魂だけで、即死だったヴェクセルをセシルのときのように助けることは出来なかつた。

「バニツシュ……貴方、何て事を……!!」

セシルは怒つた。

胸倉を掴んでレンガの地面に叩きつけてやった。

「歴史を変えたのはお前だ……作られし生人形……次だ。」

「

次？」

「そう、次。」

そう言つとバニツシュは砂のように消えていった。

サラサラと風に乗つて。

「……なつ……バニツシュ……？」

「バニツシュはこの街にいた掃除屋だが、30年前に死んでいる。

彼は屍兵として使わせてもらった。」

突如、空から声が降つて来た。

「次だ。次は誰かな……？」

甲高い声で笑う声は徐々に消えていった。

「……ヴェクセル……」

A C 0 1 2 6 0 2 2 2 V e x e l D e a t h

The ninth day

凍りつく大地に あらゆる魔物が狂いだし
光を食い尽くしていく

人々は剣を手にして生き延びる
権力ある貴族は傷をつけていく
王は法を盾に民を苦しめる

それがBC時代天地戦争の時期
そしてその二の舞がAC105年の話

多くの人々が命を落としたあの日の生き残りの人々は
無駄ではなかった彼らに冥福を祈る
好きだった料理、好きだった本
いろいろなものを用意して
彼らは帰らぬ人を待つように

ホーリイもその内の一人だった

当時は掃除屋衛生兵として母国の雪国を守っていた

「なあ、シャル！！早く帰って来いよッ！！みんなお前の帰りを待
つてるぜ！！」

シャルとホーリイは同じ看護兵で、傷ついた人を治療しながら、剣
を握り、ストリートチルドレンや老人といったか弱き人々を守った
しかし、シャルは銃撃戦に巻き込まれて亡くなってしまった

「ホーリイ・トワイライト？」

背後から名前を呼んだ声に反応してホーリイは振り返った

そこにいたのは前髪に赤のメッシュと青のメッシュを入れた男性

「・・・お前は・・・騎兵科のエリー？！」

「よっ！看護兵ホーリイ！」

「お前・・・生きてたんだなッ！！」

ホーリイはエリーに飛びついていった

エリーは体のバランスが崩れそうになるのを支え、ホーリイを抱きとめる

「おいおい、お前一体幾つだよ？」

「・・・幾つだっていいよ。はぁ・・・よかった。戦争中お前の遺体が見つからないからてつきり死んじゃったのかと・・・」

「死なねーよ。」

につこりと微笑んでエリーはホーリイの髪の毛をぐしゃぐしゃとかき回した

くすぐったそうにホーリイは笑いながら、ホーリイもエリーの髪の毛をかき回した

「エリー。」

「ん？」

「生きててくれてありがとう。」

「・・・どういたしまして。」

エリーの家のリビングで二人は昼を過ごした

テーブルの上にはシャルの写真を添えて

「そうか、シャルは戦死していたのか・・・」

「うん、そう。ただ、問題がひとつあるんだ」

「問題??」

「・・・敵国の若き王、まだ生死の確認が出来ていないんだ。今は多分身を隠しているのだろうけど、もし権力を盾に再び立ち上がるのならば、世界の流れがまた乱れ始めるだろうな。祖先のウィルおじいちゃんの時もかなり乱れたからな。」

「そうか・・・」

「エリー、俺は調べてみようと思う。」

「王をか？」

「うん。また、世界の流れが乱れ、魔物が狂いだし、光を食い尽くしていく・・・そんな時代をこれから新しい時代を築いていく子供達に味あわせたくないんだ。」

The ninth day【B】

知ってるか？ホーリイ

この街の北の方にある古い屋敷を

そこにはな、ウイルの遺品が置かれているんだってさ

その屋敷は、前世紀のものでとても古く、嫌な気配がした

ホーリイはその屋敷の中へ入っていった

王はウイルの遺品でもある武器を愛した

だから、もしかしたら何か手がかりがあるかもしれないと考えて
中はとても暗く、音など聞こえない

沈黙の世界

黄泉へと繋がっているのではないのだろうかと思うくらいの闇
しばらく進むとそこにはパスワード式の扉があった

おそらくウイルの仲間でも技術長けていたランが作ったと考えられる

【過去 現在 未来 司る三姉妹

邪神は追放され 戦争と死の神は狂いだす

光の神の消滅

同時に邪神も消滅】

「・・・北欧の神話か？」

ホーリイがそうつぶやくと、正解だったらしく、ロックが解かれた

ホーリイはロックの解かれた先へ進んだ

すると、そこには

「ウイル・・・おじいちゃん?!」

前世紀の人間であるホーリイの祖先、ウイルが肉体を残したまま

水のようなものが入ったフィルターの中で目を閉じていた
白い肌にかかる少し長めの赤色の髪の毛は長いまつげにかかっていて
唇は生きているかのように赤かった

「姉さんに写真で見せてもらった人と同じ・・・そうだ、やっぱり、
おじいちゃんだ。」

放浪魔術師【ソロ】「

『・・・誰かそこにいるの・・・？』

突如頭に声が響いた

エリーでもセシルでもレイスでも・・・誰でもない

知らない人の声

辺りを見回すが、誰かがいるわけでもない

『君は・・・誰？』

「・・・貴方こそ・・・誰？」

『・・・僕は・・・ウイル・トワイライト』

その言葉にホーリイは驚いて目を見開いた

なぜならトワイライトと言えばホーリイと同じファミリーネーム

放浪魔術師として一族が貰うファミリーネームだったのだ

『君は・・・誰？』

閉ざされている瞼は動く気配はない

「僕は、ホーリイ。ホーリイ・トワイライト」

『トワイライト・・・君も一族の者なのかい？』

「そう、僕はウイル。貴方の子孫です。」

『子孫・・・？・・・ああ・・・そうゆう事か・・・』

「？ウイル、貴方は何故そこにいるのですか？」

『・・・死なせてもらえなかったんだ僕は・・・分かるだろう、一
族の者なら。僕ら一族は

人間の手によつて作られたAI・・・』

「・・・僕らは・・・死ぬことが出来ない存在。」

『そう・・・僕らは【兵器】だから』

そこでようやくウイルの瞳が開いた

『改めて、初めまして。僕の子孫・・・』
彼はにつこりと微笑んだ

ホーリイは彼のその表情に笑顔を返した

「初めまして・・・ウイル」

『良かった・・・会えて。』

「ウイル、外へでませんか？いつまでもそんなところになくてもいいんですよ？」

もう貴方の思うような野蛮な時代じゃありませんし、貴方を兵器として捕らえる人間もいないのですよ」

『駄目だ』

ウイルは怒ったような表情でそう言った

「何故？」

『ここを離れたら、街の動力源は切れてしまうんだよ。僕はこの街自体の動力源なのだから』

「・・・ウイル、もうこの街の動力源は80年程前に魔法結晶石を使ったもの変わってしまった」

『・・・え・・・じゃ・・・じゃあ僕はこの100年近く・・・一体何のために・・・』

ホーリイはフィルターを解除してウイルを引っ張りだした

100年近く歩いていなかったウイルはすぐには足の機能が回復するわけもなく、ホーリイの方へ倒れて閉まった

「・・・ウイル、もういいんです。僕と一緒に行きましょう」

ここには王はいなかったか・・・
そう思った時だった

ドスッ

「え・・・」

背中になんか刺さる感触

口からは逆流した血液がたれだしてきた

「いや……だ……やめ……ッ……!!!!」

ウィルの声が小さく、苦しそうになっていく

「ウィ……るさん？」

「ごめんツ……つつ……ホーリイツ!!」

ウィルの腕が刃物のようにホーリイの背中に刺さっていた

ソレに気がついた瞬間、ホーリイは血の気が引いた

「やあ、ホーリイ。確か看護兵だったかな？」

背後から聞こえた声

ホーリイは青白い顔で振り返った

The ninth day【C】

振り返った視線の先にいたのはホーリイが生きているならば消そうと考えていた王だった

「ウイルのコントローラーは俺が握ってるようなものなんだよ。さて、ホーリイ。」

君には死んでもらう。【歴史再生】のためにも」

「歴史・・・再生・・・？」

「そう、お前とその仲間がセシルに出会ったから！！」

「つつ・・・前王、貴方が何故・・・セシルを知って・・・いる？！」

消えそうな声を振り絞ってホーリイは怒鳴った

「ふん、王？そんな奴もうこの世にはいないさ、俺は【世界そのもの】。」

世界の始まりから今までを見てきた者」

「何を・・・言ってる・・・クツ・・・！！！」

王の姿をした【世界そのもの】はゆっくりと近づいてきた

「歴史は変わってしまった・・・変えてはいけない過去と未来を・・・」

「過去と・・・未来？」

「そうさ、全て奴の出現により。かかわったお前達により・・・そして死ぬがいい」

室内に備え付けられていた防犯用のシステムが起動しだして、壁からセキュリティパネルが無数出現した

「セキュリティパネル！！！！」

「いけない！ホーリイ！！」

ウイルは呪縛を解いてホーリイを担ぐとセキュリティパネルからの攻撃をかわした

流石は【ソロ】という通り名を貰ったほどはある

体全体の機能もすぐに回復したようで、すばやくかわした
しかし、やはり完全には解けていないのだろう
動きが一旦止まりかけたりしている

「F.O.S.!!!」

ウィルがそう叫ぶと透明半球のシールドが二人の周りに張られた

「すごい・・・これがソロの力・・・」

「D.D.K.!!!ジャツチメントツ!!!」

さらにまた叫ぶと、光の槍が上から降ってきて、王の姿をした【世界そのもの】に向かって落ちていった

「ちっ!!小賢しい!!AIの分際でツ!!!」

王の姿をした【世界そのもの】はAIの持つ力と同等の力で最も強力といわれている術を使ってきた

「それは?!!」

魔力を持つ魔法使いでも、超能力者でも、AIでもない王が魔法を使った

これはおかしいと、ホーリイはここで気がついた

「アルティメット!!!」

「なんでこんなことになったんだ・・・」
後から屋敷に来たエリーが見たものは

砂と事切れたホーリイと赤毛の青年

見るも無残な姿で二人は横たわってたが、しっかりと手を握っていた

A C 0 1 2 6 0 2 2 3 H o l l y a n d W i l l D
e a t h

The tenth day

「・・・何故皆死んでいくのでしょうか」

夜、エイトとカレンが寝静まった頃

セシルは、レイスに問いかけた

「人はいつまでも生きてはいけない。必ず、時がくるんだ。

命は永遠のものではないから、ずっとこの世界に留まることは出来ないんだ」

冷たい風が吹き流れ

夜の静けさを深めていく

「でも、どうして私達のまわりの人間が・・・死んでいくのでしょうか。」

「・・・なあ、セシル。」

レイスは落ち着いた、いつもの明るい声とは別の、冷静な声でセシルに言った

「エイトを連れ出してきたときのこと覚えてるか？」

そう聞くと、セシルはコクリと頷いた

「あのとき俺、エイトに言ったよね？『この世には他にもエイトと同じような人が存在するんだ。俺だって・・・その内の一人さ。今はまだ言う勇氣がないけどね』って。

あの事お前に先に教えてやるよ。」

「レイス？」

「・・・俺さ、この世界に来る前。自分のいた世界・・・かな。あつちで、親父と俺で暮らしてたんだ。

マンションって言って、集合住宅の一室に二人で住んでたんだ。」
それからレイスはゆっくりセシルに話した

父親は日頃の苛々を、会社から帰ってくると俺にぶつけていた

8歳くらいからかな・・・この歳になってもずっと虐待され続けて

いたんだ

俺は決して反抗しない

耐えて 耐え続けた

日々 日々 殴られて 蹴られて

いつしか自分の部屋には薬品の臭いが充満していた

自分の体についた傷を治すために使った薬品の臭い

ソレが染み付いて、学校では先生に問い詰められたけど

何も言えずにいた

それである日、友達から教えてもらった本を手にしたんだ

どんな本だったか忘れちゃったけどさ

なんとなく開いてみたらこっちに来てた

「レイス・・・貴方記憶が！」

「俺さ、一度だけ意識が向こうの世界に戻ったことがあったんだ。

寝てたから向こうも夜でさ、誰もいなかったけど、病院のベッドの

上で俺横になってたよ。

白い壁、白い床、白いベット

俺に打たれている点滴が無数、機械もかなり体についていた。

その時俺、思ったんだ。俺、死んでるのかな？って。

目の前にかざした俺の手は青白くてさ、触ってみると冷たくてさ。

声も出てこなくてさ、死んでるみたいだった。」

「・・・死・・・。」

「でもさ、生きてるって実感がとてもうれしかった。そこにあるん

だ、感覚が、視覚が、聴覚が。

生きてるって、感じることもなんだ。そう思うとうれしかった。」

「・・・。」

「セシル、もう過ぎたことを考えるな。お前に聞こえるか？

ヴェクセルとホーリーの声が。」

「声？」

『セシル、人はいつか死ぬんだ。俺達はその時が来たただけだ。別に
お前が悪いわけじゃない。』

だからいつまでもそんな顔をするなって。』

レイスの言葉にヴェクセルとホーリーの声が重なって聞こえた

『ただ、気をつける。何者かが、みんなの命を狙っている』

「何者かが？」

『【世界そのもの】』

「・・・世界・・・」

世界そのもの

ソレは一体何なのか

The eleventh day

翼をもぎ取られた天使は二度と天へは羽ばたけず

ただ ただ この世界の闇の中を走り回って逃げることにしか出来ない
自分以外には誰もいないこの世界で

感じるのは

愚かな心配

邪悪な人間の生み出した欲望の影

「主、イエスはいいました『自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい』」

レイスは突然そう言った。

隣にいたセシルは不思議そうにレイスの方をみていると、レイスがセシルの視線に気がついて笑って答えてくれた。

「俺の世界で、ずっと昔にいた人の言葉なんだ。」

「・・・昔のお方の言葉ですか・・・」

「そぞ。」

「でも、何で突然？」

「え？ああ。俺ん家は日本人の家計だから仏教ってイメージあつかもしんねーけど、でも何故かキリスト教なんだよなあ。それに学校もキリスト教学校で・・・」

「?????」

セシルは日本人と仏教。そして、仏教とキリスト教の関係が全くわかってないようだ。

困惑した表情で必死に考えている。

「ああ……ごめん。わかんないよな?」

「すみません……。」

「いやいや。俺が悪かった。今度もうちよつと分かりやすく教えるな?」

「今度?」

「そ、俺今からちよつと学校行ってくるから。今日、本の返却日なんだよ。」

「そうですね。では、行ってらっしゃい。」

店の扉を開けて外へ出たレイスが振り向いて笑顔で「行ってきます。」

と、言い駆け出して行った。

その時セシルにはレイスの、ひとつひとつの動作がゆっくりと見えた。

まるで、最後の笑顔のような気がして、胸騒ぎさえしていた。

「……まさか……ね。」

レイスは、大学のとても広い庭を駆けて行っていた。

すると、庭の中心辺りで人の壁が出来ていて、何やら騒がしい。

「あ、レイス!」

「ああ……ガイ。どうしたの、この騒ぎ。」

「いや、特にたいした事でもないんだが、ウーパールーパーがいるらしくて」

「ふーん……（てかこの世界にウーパールーパーいんのかよ。）

まあ、いいや。俺本返してくる。まだ、図書委員いた?」

「キルならまだ図書室の地下で文献漁ってるぜ。ありゃ本の虫だな。」

「あははっ!! 違いねえや!!」

思いつきり笑つてからガイと分かれて、レイスは大学の北棟のずつと奥にある図書室へ向かった。

バンツ!! と思いつきり扉を開けた。

「キル!! いるー?」

暗い室内。

電気もつけずにカーテンは閉ざされていた。

誰もいない室内は少々気味が悪い。

「キルはまだ地下なのかな・・・まあいつか。」

レイスは本を返却するための、紙で出来たカードに本の名前とコード番号、そして返却日の印鑑を押して、本に挟むと、図書委員用の机の上に置いた。

丁度その時だった。

学園の庭の方から叫び声が聞こえてきたのだ。

はっとして、レイスはカーテンを開けて庭の方を見た。

すると、そこには巨大なウーパールーパーのような生物。

「なんだ・・・あれ・・・」

「さっきのウーパールーパーだよ。」

怪我をしたガイが、窓の下にいた。

おそらく、アイツの攻撃があつたのだろう・・・その時ここまで吹っ飛んで来たと思われる。

背中をつけている壁がへこんでいた。

レイスはガイを引き上げた。

「大丈夫?!」

「ああ、これくらい平気平気。」

「平気って・・・平気じゃないよこんなの。ホラ、癒すからじつとして。」

「【癒す】? 手当てじゃなくて癒すの?」

「・・・ガイ、俺は魔法使いなんだ。」

「え？・・・お前が？」

「そう。だから、癒す。お前を助ける。いや、皆助ける！！」
レイスは魔法でさっと傷を消した。

「ごめんね。治療と言っても俺は癒力は低くて一時的なものしか出来ないんだ。多分二日くらいしか持たないかも・・・」

「それだけあれば十分。」

「ガイ、ごめんね。」

「へ？何が・・・」

傷口が塞がったことを不思議そうに見ているガイが再び顔を上げると、そこにはもうレイスの姿は無かった。

「・・・お前はいつだって・・・謝ってばかりだな。馬鹿野郎が。」

The eleventh day【B】

ピシッ

「！」

テーブルの上に置いていたセシルのカップにヒビが入った。

「・・・レイス!!!」

セシルは外へ飛び出そうとした。

しかし、その時、視界に突然の訪問者。

「・・・バルド?! 貴方生きていて・・・」

本当のセシル。バルドがセシルの目の前にいた。

「何もかもおしまいだ・・・世界は、バランスを保てなくなった。」

「何を言って・・・」

「形を作るのはこの世界に属するものだけではない。忘れてはいけないものもある。

変えてはいけないものもある。空は空のまま、人は人のままで・・・

いつまでもあり続けて、でも、変わっていく。

でも、無理矢理変えるものではない。」

バルドがそう言うと、辺りの空気が重力がかかったように重く、息苦しくなった。

「バルド・・・」

「全てお前のせいだ!!! セシルッ!!!」

「!!!」

バルドが叫んだとたん、部屋の中に闇が充滿して、セシルに襲い掛かってきた。

セシルは襲い掛かる闇を避けて、扉から飛び出して行った。

(このまま街へ行ったら街にも被害が・・・どうすれば・・・)

「ああっ! エイト!!! カレン!!!」

そうこう考えている間に、いつの間にか目の前にはエイトとカレンが立ちふさがっていた。

でも、ようすがおかしい。

俯いた状態で何か手に持っている。

「二人ともどうし・・・」

セシルの首の横で風が横切る音がした。

「・・・セシル・・・ころ・・・す」

「お前・・・本当は・・・存在しては・・・いけない。」

横切ったのはエイトの持っていたナイフだったらしい。

顔を上げた二人には、血の気など無かった。

「二人とも・・・死人形に?!」

死んで、意識もない抜け殻となった二人の体は、何者かの手によって、操られている。

呆然としていると頭上から声がした。

「哀れな二人。でも、他の皆も哀れ。」

そう言ったのはいつかヴェクセルとレイスの喧嘩を宥めたシオンだった。

「貴方・・・」

「僕に何を聞いても無駄だよ。僕も死人形だからね。言っただろう? 【亡霊】だと。」

僕に生前の記憶などないし、今ここに存在しているときの感情も偽りだ。

全て何者かの手によって書き換えられる記憶なのだから。」

「・・・貴方も・・・死んでいるのですね・・・」

「そう、そして僕も・・・君を殺さなければならぬ。それが、僕ら【死人形】の使命なのだから。僕らは、何者かの命令には歯向かえない。強制されているからね。心も、体も・・・そして記憶も。」
「そう言いながらシオンは大鎌を振り上げた。」

「まだ僕は心は全て支配されていないから言う。レイスのところへ行ってあげて。」

振り下ろされる鎌をセシルはひらりとかわす。

後ろからバルドが魔法で攻撃して、前方からはエイトとカレン。

「レイスのところ？」

「早く。伝えたいことが彼はあるんだ。君に。」

「まさか・・・レイス・・・」

「早く！！」

シオンに怒鳴るように言われて、セシルは頷くと魔法で全員にストップをかけた。

そして、足早にレイスの向かった学園にむかった。

大道魔術師。お前は永遠だが、大罪だ。だが、強く生きる

The eleventh day【C】

誰かが傷を癒しても 誰かが傷をつけている
貴方には聞こえるだろうか 私の心の悲鳴が
聞こえなかったからこういう結果になったのだろうね
でももういいんだ うれしかった
貴方と出会えて

今度会うときは貴方は私に気づかないかもしれない
私も貴方に気づかないかもしれない

でも

忘れないでいて

その優しさを

ガッシャーンッ！！

ガラスの割れる音がレイスの学園の付近で起きた。

学園は既に半壊していて、学園から出たところでも家が崩れたり、
怪我人が出たりと

悲惨な状態であった。

「ゲあッ！！！！」

巨大なウーパールーパーのようなものは、今ではもう化け物と化し
ていて、その巨大な体で

レイスにのしかかったり、吹き飛ばしたりした。

そのせいでレイスの体は非常に傷つき、出血が激しい。立ち上がり、また化け物に立ち向かおうとするが、血が足りないせいでフラフラしている。

（ちっ・・・しまった。やられすぎたよ。血が足りない・・・目の前もあんまり見えてない。）

「ははっ・・・情けないな。」

レイスは朦朧とする意識の中、足の速くなる魔法を使った。

「こいよっ!!!」

化け物を挑発して、レイスは走り出した。

向かう先は廃墟となつた郊外。

そこまで行けばこれ以上被害は出ないと考えたからだ。

しかし、簡単にそこまではいけない。

走っていると、化け物が後ろから攻撃してくるのだ。

レイスは魔法で壁を作り、防御したり、攻撃したりするが、防いでも攻撃はあまり効いていないようで、対処の方法はなかった。

「ウガアアアアアアアアッ!!!」

「!!!!」

化け物が口から液を吐いてレイスに攻撃を仕掛けた。

レイスはそれをかわそうとしたが、完全に避けきれず、片足にかかってしまった。

「痛ッ!!!」

液は酸性だつたらしく、片足の皮膚を少し溶かした。

思わずレイスはしゃがみこんでしまった。

しかし、その間にも化け物は近寄ってきている。

「ふざけんなよッ!!!開けッ!光の扉ッ!!!」

魔法を唱えて、大きな光の扉を召還し、扉を開かせ、その間から光が溢れ出し、化け物にぶち当たった。

「ウガアアアアッ!!!」

化け物はその場でしばし、のたうちまわるが、すぐに体勢を整えなおし、レイスへ再び向かってくる。

かなりのダメージを与えたはずなのに・・・と、一瞬驚いて目を見開くが、レイスは立ち上がり、また走り出す。

（まるであの時のようだ・・・親父に小さい頃追いかけられたときのような・・・）

『待て！この糞餓鬼！！殺してやる！！』

（嫌だ。嫌だ、死にたくない！！）

『・・・！！待て、・・・！！！！』

（どうして皆助けしてくれないの？ねえどうして？）

どうして俺はいつもこんなに恐い目にあわなくちゃならないの？

レイスは郊外までくると、立ち止まり、化け物の方へ振り返った。

「なあ、親父。もう止めにしよう・・・」

『ガールルル・・・』

「どうして・・・アンタはこっちの世界にまで来て俺をいじめるんだ？」

『グル・・・レイ・・・ス・・・』

「親父・・・もう止めよう。終わりにしよう。」

レイスは近寄って来た化け物にそっと手を触れた。

「ねえ、俺何か悪いことした？」

『・・・レ・・・イス・・・』

ヒュオオ・・・

「親父、もう俺疲れたから家に帰ろう？」

ヒュオオオ・・・

「帰ったら母さんに謝ろう?」

『……すまな……い……オレは……もう……しん……
で……いる』

ヒュオオオオ……

「そっか……なら、二人に祈るね。」

『すまな……い……れい……す……わる……かった……
』

「俺……今本当の名前を思い出した……俺の名前は……

」

ザシュツ

「……今、レイスが……死んだ。魂も、自分の世界に返った……」

セシルはレイスの最期には間に合わなかった。

どうすることも出来なかったセシルは、その場に崩れるように座り込んだ。

「皆死んでしまった……どうして皆死ななければならなかったんだ……」

瞳からこぼれる涙は悲しみと自分への憎悪。

「どうしてツ!!!!!!?」

地面に涙は零れ落ち、染みを作っていく。

しかし、それは突如降り始めた雨によって見えなくなってしまった。

ザアアアアアアア・・・

「大道魔術師セシル。自分の世界に返りなさい。」

「・・・」

振り返った視線の先には、死人形となっていたシオン。

背後にはエイトとカレンにバルド。ヴェクセルとホーリィにウィルもいた。

しかしやはり彼らには血の気がない。

魂の存在も感じない。

冷え切った人形だ。

「聞こえましたか？大道魔術師。」

「・・・ひとつ。教えてくれませんか？」

「・・・何。」

「どうして・・・皆死ななければならなかったのですか・・・？」

「・・・お前とかかわった者は全員死ななければならぬ。なぜなら、お前はこの時代に存在してはいけないのだからな。」

「千年前の住人がこの時代にいることで・・・歴史が狂った・・・と言ったところですか。」

「そういうことだ。」

「・・・私は・・・とんでもないことをしてしまった・・・。私のせいで、皆さんの命を・・・奪ってしまった・・・！！！！」

握り締めた拳からは血が垂れだした。

「後悔したところで命は戻らない。」

「分かっています・・・」

セシルはゆっくり立ち上がり、杖を空間内から取り出すと、それを剣へと形を変えた。

「罪ならば・・・死ぬ。」

The last day

何かと忙しい社会。

情報は目の前を通過していく。

環境は破壊されたり南極の氷は溶け始め、海面上昇の恐れがある。

空気はどんどん汚れていく。

オゾン層は破壊される。

地球温暖化がおき始めてている。

いじめが問題で死んでしまう人もいる。

殺人事件も増えていく。

尽きないほど問題は増えていくばかり。

これが私達の住む世界なんだ。

私達は完全に忘れていつている。

失うことの恐ろしさと悲しさを。

忘れている。

傷つけることによって帰ってくる。

世界からのしっぺ返しを。

私達人類は愚かだ。

でも今からでも遅くない。

まだ時間は残っている。

少しづつでいいんだ。

前へ進むんだ。

そして傷を塞いでいくんだ。

綺麗に。

もう二度と望まない災いの風が

その穴から吹き流れてこないように。

「おはよーっ!! 鈴守!!」

今日も世界のどこかで子供の元気な声が響いている。

この声を守るのは私達だ。

「!ごめん!! すぐ行く!!」

鈴守と呼ばれた少年。

黒羽鈴守は学生服を着て、通学鞆を手にすると、急いで外へ出た。

「行って来ます!」

(・・・誰に? 親父とお袋は別として・・・俺、今誰に言ったんだ・・・?)

誰もいない家の中をずっと見つめて黒羽は戸惑った。

「おーい? 鈴守?」

「うえ? ああ、行くよ拓也。」

黒羽は鍵を掛けると、拓也と共にいつもの通学路を通って学校へ向かった。

「あ、そうだ鈴守。これこれ。」

そう言つて拓也が取り出したのは分厚い本。

とても古いもので、英語で【Magica=On Line】と書かれている。

(Magica・・・? なんだろう・・・凄く懐かしい気がする。)

「で? それが何?」

「この本お前読んでみるよ!! 俺泣いちゃった。」

「感動的な本なの?」

「うーん・・・説明は苦手だから無理! でも、このタイトルにOn

Line っであるだろ? これは、【友達の輪】って意味らしい。」

「ふーん・・・」

ドカッ

黒羽は不注意で前方から来た人物にぶつかってしまった。

「うわ！あ、ごめんなさい！！大丈夫ですか？！」

ぶつかつたせいで前方から来た人物は後ろへこけてしまっていた。

レイスは立ち上がりせようと手を差し伸べた。

「すみません、不注意でぶつかつてしまいました。大丈夫です。」

「……………」

ぶつかつてしまった人物のあげた顔を見て鈴守は胸に突っかかる思いがこみ上げてきた。

黄緑色の長髪に蒼い瞳。

何処かで聞いたことのある声。

懐かしさのあるその優しい表情。

「どうかしましたか？」

立ち上がった人物は不思議そうに鈴守の顔を覗き込んできた。

様子のおかしい鈴守に気がついた拓也も鈴守の肩を揺さぶる。

「おい！鈴守どうしたんだ？」

何故だ、何故だ。

何故覚えているはずなのに思い出せないんだ。

そう言う気持ち鈴守の中でぐるぐる回り、鈴守には拓也の声も届いていない。

「……………あ……………貴方は……………」

（そう、俺はコイツを知っている。知っているんだ。）

「え……………と……………鈴守……………君？」

「貴方は……………」

しかし、それから先の言葉が出てこない。
名前が思い出せないのだ。

「……………すみません。なんでも……………ありません。」

「そう……………ですか。何だか分かりませんが……………その、体調が悪いのであれば学校に行かないほうが……………もうすぐなら保健室で休むなど……………」

「すみませんでしたっ!!」

「あ、おい！鈴守!!・・・あ、あの、すみませんでした!!」

拓也がぶつかつた相手に謝罪してから走り去ってしまった鈴守を追いかけていった。

ぶつかつた相手は、走り去って行った鈴守の後ろ姿を不安そうに見送っていた。

「おい！鈴守!!今日のお前変だぞ!!」

「・・・」

学校についてから、鈴守は相談室と言う特別な教室に拓也と先生と一緒に居た。

「不安定なのかもしれないわね・・・まだ退院したばかりだしね・・・」

鈴守君、ゆっくりでいいのよ？思い出せていない部分があるのなら無理矢理じゃなくていいのよ？」

先生がそう言うと、鈴守は机をバンツと叩いて立ち上がった。

「駄目なんだ!!アイツだけは絶対に思い出さないといけないんだ!!」

「・・・鈴守」

駄目なんだ・・・といい、俯いてしまった鈴守に拓也は困ってしまった。

先生もどうしたものかと、困ってしまった。

しかし、その時だった・・・。

突然鈴守は口を動かした。

「くそっ・・・何でアイツは俺のこと思い出せないんだよッ!!俺はここまで鮮明に覚えているのにッ!!地下通路で店開いたじゃないかッ!!ルインの空飛んだじゃないかッ!!魔法教えてくれたじゃないかッ!!ヴェクセルと闘って!ホーリイと知り合って!ノート的事件でまたホーリイのこと救って!」

エイトを研究員達から救って！カレンと知り合って！シオンとも知り合った！！街のいろんなところに皆で行った！！俺はまだ覚えてる！お前の歌ったあの綺麗な歌声！！」

一人怒るように口を動かす鈴守を拓也と先生はただ啞然としてみているしかなかった。

「・・・ツ！大道魔術師！！」

そう言い、鈴守は学校を飛び出した。

「ちよっ！鈴守！！」

「鈴守君？！」

鈴守は走って学校を飛び出した。

（思い出したんだ・・・お前のこと。）

何処へ向かっているのかは、自分でもわからないが、でもその先には先ほどぶつかってしまった相手がいると鈴守は分かっていた。

学校から約3km離れたところにある高台。

そこからは綺麗な海が見える。

鈴守はそこへ向かっていた。

高台への階段を駆け上り、頂上へ向かった。

長い長い階段を休むことなく駆け上がった。

そして、頂上へつくとそこには一人の人影が。

それは海の方へ向いている男性の長い髪の毛がさらさらと風とダンスをしている後ろ姿。

「あのッ！！！」

鈴守が叫ぶを男性は振り返った。

優しい微笑みを忘れずに。

「あの、俺、黒羽 鈴守！！！」

「私は瀬志瑠。 神無月 瀬志瑠。」

「久しぶり！！・・・そして、初めまして！！！」

「お久しぶり・・・レイス。」

「！！！」

出会いは何時だつて突然で
すぐ近くにあつて
なかなか気づかないものだ

だけどそれに気づけたら
それはすばらしいことなのかもしれない
一期一会と言う言葉の意味のとおり
やはり一回の出会いでも大切なものなのだ

出会えた幸せ
再び出会えた幸せ

全ての人に届け

出会いの幸せよ

The last day (後書き)

自分が一番この作品のこと分かっているはずなのに気に、なっ
てしょうがない自分がいたり(笑)

半分強制的に終わらせましたが、楽しんでいただけましたでし
ょうか？

兎に角、楽しんでもらえたならそれだけでいいです。
では(´・`・´・`・´)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4550b/>

magica=On Line=

2010年12月31日15時03分発行